



「オッペケペー節」

最近、発見されたという1900年の、川上一座による歌唱は、独特の雰囲気を与えていて、とても面白い。博多のアダチ宣伝社による、現代的な語り口も、とてもいい。100年以上も前に、パリでこのような唄を歌っていたこと自体、まことに驚きだが。

ままにならぬは 浮世のならい 飯になるのは 米ばかり ア オッペケペー オッペケペ
ッポー ペッポペッポ

(収集プロフィール)

川上 音二郎（かわかみ おとじろう、1864年2月8日（文久4年1月1日） - 1911年11月11日）は、「オッペケペー節」で一世を風靡した俳優・芸人。川上の始めた書生芝居、壮士芝居はやがて新派となり、旧劇（歌舞伎）をしのぐ人気を博した。幼名は川上 音吉（おときち）。

経歴

筑前国博多中対馬小路町、現在の福岡市博多区対馬小路に生まれた。継母と折り合いが悪く、1878年（明治11年）、家を飛び出し大阪へ密航。見つかるが出奔し東京へ行った。福澤諭吉の書生として慶應義塾に学び、職を転々としながら、反政府の自由党の壮士となった。

* 14歳で上京、給仕、巡査などの職を転々としたのち、郷里で政治運動に投じ、自由童子と名のって過激な言動に走り、しばしば投獄された。やがて政談演説が禁止されると、浮世亭〇〇（うきよていまるまる）の芸名で大阪の寄席に現れ、時局風刺の漫談を演じ、1887年（明治20）には京都の中村駒之助（こまのすけ）一座で俳優としての経歴を始めている。その後、書生芝居の一座を組んで巡業、1890年に東京の開盛座に進出、翌年『板垣君遭難実記（いたがきくんそうなんじつき）』をもって念願の中村座公演を果たした。その特異な格闘技や即興的演技で人気を得、ことに幕間（まくあい）に演じたオッペケペー節が評判をよんだ。1893年パリに赴き、帰国して西洋演劇の意匠を取り入れた翻案劇『意外』『又意外』『又々意外』を、さらに日清（にしん）戦争の勃発（ぼっぱつ）に乗じて『日清戦争』を上演するなど大成功を収めた。1896年には東京・神田に自力で川上座を建設したが、代議士に立候補して落選し、人手に渡った。1899年には妻の貞奴（さだやっこ）とともに一座を率いて欧米に公演し、好評を得て2年後に再度渡欧、ほとんどヨーロッパ全土を巡業した。帰国後、正劇（せいげき）運動と銘打って興行形態を改革し、『オセロ』『ハムレット』などを上演。しかし、俳優としてはあまり評価されず、晩年は興行師としての仕事に専心し、大阪に帝国座を建てたりしたが、病のため明治44年11月11日没。草創期の新派劇の先覚者として評価されている。

- ・ 文久4年（1864） 博多中対馬小路に誕生
- ・ 明治10年（1877） 家を飛び出し、大阪から東京へ 自由党の壮士に
- ・ 明治20年（1887） 浮世亭〇〇（マルマル）と名乗りオッペケペを始める
- ・ 明治23年（1890） 書生仁輪加を組織し、巡業開始
- ・ 明治24年（1891） 川上書生芝居旗揚げ。「板垣君遭難実記」の大ヒット
- ・ 明治26年（1893） 貞奴と結婚

- ・明治27年（1894） 日清戦争勃発。現地視察しての戦争物大ヒット
- ・明治28年（1895） 日清戦争実記「威海衛陥落」で歌舞伎座の舞台に立つ
- ・明治31年（1898） 衆議院選挙に立候補するも落選
- ・明治32年（1899） アメリカ巡業へ
- ・明治33年（1900） 米、英、仏で公演。仏政府からアカデミー勲章を授与
- ・明治34年（1901） スペイン、ロシア公演
- ・明治35年（1902） ロシア皇帝ニコライ2世からダイヤ入り金時計を授与
- ・明治44年（1911） 10月大阪に帝国座開場。11月帝国座の舞台で死去

* オッペケペー節

1883年頃から、「自由童子」と名乗り、大阪を中心に政府攻撃の演説、新聞発行などの運動を行って度々検挙された。1885年に講談師の鑑札を取得。自由民権運動の弾圧が激しさを増した1887年（明治20年）には「改良演劇」と銘打ち、一座を率いて興行を行った。また、落語家の桂文之助（後の二代目曾呂利新左衛門）に入門、浮世亭〇〇（うきよてい まるまる）と名乗った。やがて世情を風刺した『オッペケペー節』（三代目桂藤兵衛作）を寄席で歌い、明治22年（1889）から明治27年、28年の日清戦争時に最高潮を迎えての大評判となる。

川上一座は書生や壮士ら素人を集めたもので、書生芝居、壮士芝居と呼ばれた。1891年（明治24年）2月、書生芝居を堺市の卯の日座で旗揚げ。同年、東京の中村座で「板垣君遭難実記」などを上演。東京でもオッペケペー節が大流行した。川上は1893年、フランスへ渡り、2か月ほどの短い間だがパリの演劇事情を視察した。

1894年、人気芸者の貞奴（本名：小山 貞）と郷土の先輩である金子堅太郎の媒酌で結婚した。伊藤博文が貞奴をひいきにしており、伊藤博文の三羽カラスといわれた金子堅太郎に媒酌の役目が回ってきたとも。

戦争劇・新派劇

1894年、日清戦争が始まると、いち早く戦争劇「壮絶快絶日清戦争」を仕立てた。続いて川上は朝鮮半島に渡って戦地の状況を実見し、それをもとに「川上音二郎戦地見聞日記」を上演。これらの戦争劇は大評判となった。翌1895年、歌舞伎座の舞台で「威海衛陥落」を上演した。歌舞伎の殿堂に素人あがりの役者が出るのは異例のことであり、劇通の人々を驚かせた（市川団十郎は、川上が歌舞伎座の桧舞台を踏んだことに激怒し、舞台を削り直させたと言われる）。同年末には、泉鏡花の小説を舞台化した「滝の白糸」を浅草座で上演。この作品は新派劇の代表的な演目になった。1896年（明治29年）東京市神田区に川上座を開場した。

1898年（明治31年）3月と8月、第5回総選挙と第6回総選挙に出馬し、ともに落選。資金繰りの為に川上座を手放し、妻・姪とともに下田市からいかだで当ても無く漂流し、結局は下田へ戻る。

海外興行・翻訳劇

1899年（明治32年）、渡米して現地で興行を行う。このとき、妻・貞奴が舞台に立つことになり、好評を博した。1900年（明治33年）パリ万博で公演。米国興行に続いて人気を博した。翌年、いったん帰国したあと、再びヨーロッパに渡り、1902年に帰国した。

1903年以降、『オセロ』『ハムレット』『ヴェニス商人』など翻訳劇を積極的に上演し、メロ

ドラマ中心になった他の新派劇と一線を画そうとした。1908年（明治41年）興行師として成功し、現在の大阪府中央区北浜四丁目に、洋風の劇場・帝国座を開場する。同時に帝国女優養成所を創設。

1911年（明治44年）舞台上で倒れ死去。「汽車が眺められるところに」という音二郎の遺言により、当時博多駅が近くにあった承天寺に葬られる。

弟子

川上秋月 音二郎と同じ元新派の俳優で、川上元次郎と名乗った。後に寄席に出て「新講話」と名付けた、客から借りた品物をお題にした噺をつとめることを生業にした。

死後

川上音二郎像1985年、NHKの大河ドラマで妻の川上貞奴を描いた『春の波濤』が放送された。貞奴は松坂慶子、音二郎は中村雅俊が務めた。

川上一座が1900年に欧米興行を行った際に録音したオッペケペー節のレコードが発見され、1997年に『甦るオッペケペー節』という題でCDが東芝EMIから発売された。ただし音二郎と貞奴の肉声は録音されていなかった。（わづか102秒足らずだが、これが日本人初のレコードへの吹き込みといわれている）

福岡市博多区の川端通商店街北側入口近くにある地下鉄の駅階段横には、音次郎の銅像あり、道を隔てて博多座と向きあっている。

2007年11月のシアタークリエのこけら落としでは、三谷幸喜作・演出の『恐れを知らぬ川上音二郎一座』が上演された。川上音二郎役はユースケ・サンタマリアが務めた。

川上音二郎忌。命日の11月11日には川上が眠る承天寺で故人を偲んで、オッペケペー節などの催しが行われている。

上野の谷中霊園の霊園事務所前に顕彰碑の台座が残っている。（上の銅像は戦中の金属供出で無い）

高輪の泉岳寺境内には川上音二郎の碑があるが、もともとは墓が「首洗いの井戸」の真後ろにあったとのこと。それが谷中に移ったともいわれる。

泉岳寺の檀家墓地（一般参拝者は立ち入り禁止）には川上音二郎一座の俳優達が欧州公演をした時の記念碑がある。

東京の神田三崎町には音二郎縁の劇場があったことを示す案内板がある。

参考文献

倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』岩波書店、1980年

福岡市 編『ふくおか歴史散歩』

安永幸一 著 『山と水の画家吉田博』弦書房、2009年 （川上の海外公演での、舞台背景画を描いた人物）

初めて啞然坊の写真をみたとき、私はダリを連想した。よく見ると、かなり違うのだが、風貌が、どことなく似ている。明治後半から活躍した、初期の大物演歌師である。私が子供のころ、漫談家の都家かつ江や玉川スミが、テレビ等でよくこの唄の替え歌を歌っていた。元唄が啞然坊とは、そのころは、まったく知らなかったが。やはり、最後のハハッのんきだね～、の節が耳に残った。

「のんき節」（詩：作曲 添田啞然坊）

学校の先生は えらいもんぢやさうな えらいから なんでも教へるさうな 教へりや 生徒は無邪気なもので それもさうかと 思ふげな ア ノンキだね

成金といふ火事ドロの 幻燈など見せて 貧民学校の 先生が 正直に働きや みなこの通り 成功するんだと 教へてる

（収集プロフィール）

添田 啞蟬坊（そえだ あぜんぼう、旧字体「添田啞蟬坊」、1872年12月25日（明治5年11月25日）-1944年（昭和19年）2月8日）は、本名を添田平吉といい、明治・大正期に活躍した演歌師の草分けである。号は、自らを「歌を歌う啞しの蟬」と称したところから由来。

経歴

神奈川県の大磯の農家の出で、四男一女の三番目の子として生まれる。

叔父が汽船の機関士をしていた関係で、海軍兵学校を志願して上京したが、受験勉強中に浅草の小屋掛芝居をのぞいたのがきっかけで、その世界にのめり込む。海軍兵学校には入学せず、汽船の船客ボーイになり、2年で挫折。以後、横須賀で土方人夫、石炭の積み込みなどの仕事に従事していたが、1890年（明治23年）、壮士節と出会う。当時は政府が廃藩置県、地租改正、学制、徴兵令、殖産興業などの政策を実行している最中で、自由民権運動も盛んな時代であり、「オッペケペ」で有名な川上音二郎らの壮士芝居も、この時代のもの。

啞蟬坊は、最初の演歌といわれる「ダイナマイト節」を出した青年倶楽部からその歌本を取り寄せて売り歩いたが、のち政治的な興奮が冷めていくと、政治批判ではない純粋な演歌を目指して、自身が演歌の歌詞を書くようになる。啞蟬坊が最初に書いたといわれているものは、「壇ノ浦」（愉快節）、「白虎隊」（欣舞節）、「西洋熱」（愉快節）などで、1892年（明治25年）の作である。これ以降、「ノンキ節」、「ゲンコツ節」、「チャクライ節」、「新法界節」、「新トンヤレ節」と続く。1930年（昭和5年）に「生活戦線異状あり」で引退するまでに182曲を残したという。

1901年（明治34年）に結婚し、本所番場町に居を構えた。翌年長男の添田知道（添田さつき）が生まれる。この頃、友人と始めた「二六新報」がうまくいかず、茅ヶ崎に引っ込むが、「渋井のばあさん」と呼ばれていた知り合いの流し演歌師に頼まれてつくった「ラッパ節」が、1905年（明治38年）末から翌年にかけて大流行する。幸徳秋水・堺利彦らとも交流を持つ。こうしたことがきっかけで、堺利彦に依頼を受け、「ラッパ節」の改作である「社会党喇叭節」を作詞。1906年（明治39年）には、日本社会党の結成とともにその評議員になるなどし、その演歌は、社会主

義伝道のための手段になる。

1910年（明治43年）、妻タケが27歳で死去。唾蟬坊は悲嘆して、知道の妹は他家に養子にやられる。やがて唾蟬坊は、当時の有名な貧民窟であった下谷山伏町に居を定めた。なおここは、一軒が四畳半一間、それが十二軒ずつ四棟、計四十八軒ならんでいたのので、「いろは長屋」と呼ばれていた。

その後、全国行脚をしながら、屑屋の二階に居候。そこで死去した。浅草、浅草寺の鐘楼下に添田唾蟬の碑が、添田知道筆塚と共にある。

その他

妻タケが死去してから唾蟬坊が住んでいた下谷地区にあった貧民学校、下谷万年小学校の校長は坂本龍之輔で、のち添田知道はその小学校に入学し、彼に教えを受けた。知道の著『小説 教育者』は当時の教育体験を背景にしたもので、主人公は坂本であり、小説といいつつも、かなり史実に添ったものである。添田父子は、坂本と深い親交を持っていたといわれるが、知道が途中で挫折したため、この小説は添田父子が登場するところまでは書かれていない。

竹中労の文とかわぐちかいじの挿絵による『黒旗水滸伝 大正地獄編』（皓星社 2000年）の中では、唾蟬坊は香具師一テキヤの世界の飯島源次郎、その実子分（跡目候補）山田春雄、あるいは倉持忠助の大立物と親交をもち、客分として尊敬を受ける演歌師として登場している。近代露天商組合のリーダーで、国会議員にもなった倉持は、自身演歌師の出身でもあり、唾蟬坊を師と仰いでいたという。またタレント議員第一号・石田一松が歌い大ヒットした『のんき節』は、唾蟬坊の作品に手を加えて作ったものである。他に演歌の収集、保存でも功績のあった小沢昭一は、その駆け出しの頃、添田父子と親交があったという。

1960年代以降、高石ともや、高田渡、加川良ら日本のフォークシンガーが好んで彼の作品を唄い、日本のフォークソングの原形として広まった。しかし、壮士演歌が全く俗な艶唄（つやうた）にすりかえられたように、日本のフォークソングも、アコースティックギターを使っただけの艶唄のようなものにすり替わったことまで共通している。

1990年代に入り、ロック・バンド「ソウル・フラワー・ユニオン」のチンドン・スタイルの別動隊「ソウル・フラワー・モノノケ・サミット」が、唾蟬坊の『ラッパ節』『むらさき節』『ああわからない』などをレパートリーにし、『アジール・チンドン』、『レヴェラーズ・チンドン』、『デラシネ・チンドン』にそれぞれ収録している。なお、「ソウル・フラワー・モノノケ・サミット」は、唾蟬坊の息子添田さつきの『東京節』『復興節』『ストン節』も上記のアルバムでとりあげている。

主な曲

「壇ノ浦」（愉快節）

「白虎隊」（欣舞節）

「西洋熱」（愉快節） 1892年（明治25年）

「ノンキ節」

「ゲンコツ節」

「チャクライ節」

「新法界節」

「新トンヤレ節」

「生活戦線異状あり」 1930（昭和5） *この曲で引退する

引退までに182曲を残した。

*ああ金の世

ああ金の世や金の世や。地獄の沙汰も金次第。笑うも金よ、泣くも金。一も二も金、三も金。親子の中を割くも金。夫婦の縁を切るも金。強欲非道と譏（そし）ろうが、我利我利亡者と譏ろうが、痛くも痒くもあるものか、金になりさえすればよい。人の難儀や迷惑に、遠慮していちゃ身がたたぬ。

*ラッパ節 作詞 のむき山人（啞然坊の別名）

わたしゃ よっぽど あわてもの ガマグチ拾うて よろこんで にっこり笑うて よく見たら 馬車に轢かれた ヒキガエル トコトットト

*電車問題 市民と社会篇（ラッパ節 の替え歌）

（市民曰く）

天下の公道を利用して 埠頭の暴利を占めながら 尚飽き足らで嘘をつき 値上げをするとは太い奴 トコトットト

（会社曰く）

雨の降る日も風の日も あちらこちへ乗り換えて 広い市中を乗り廻し それで四銭じゃ安すぎる トコトットト

（市民曰く）

勝手な無駄口聞くよりも 外国電車のれを見よ 安くて広くて清潔で 人をひき殺すこともない トコトットト

（会社曰く）

我利我利亡者と呼ばれよが 詐偽よ泥棒とそしらりよが 痛くも痒くもありゃしない 金になりさえすればよい トコトットト

*啞然坊のセンスもさることながら、大正初めというその時代が、今に通じる非常に「現代的」な時代であったということも言える。

添田啞蟬坊・知道の著作

『添田啞蟬坊・知道著作集』全5巻・別巻1 刀水書房、1982-84年

啞蟬坊流生記 （解説・荒瀬豊）

浅草底流記 （解説・小沢昭一）

空襲下日記 （解説・荒瀬豊）

演歌の明治大正史 （解説・安田武）

日本春歌考 （解説・大島渚）

別巻 流行歌明治大正史 （解説・小島美子）

『啞蟬坊流生記』が、啞蟬坊のもので、同巻には知道の書いた啞蟬坊のその後の様子を伝える著作が含まれている。その他は、知道の著作。『日本春歌考』は、大島渚の同名の映画の下敷き

になったものだが、本の内容は春歌の収集と考察について書かれたものであり、これがそのまま映画になったのではない。

*参考文献 木村聖哉 『添田唾蟬坊・知道一演歌二代風狂伝』 リプロポート 1987年

加賀誠一 『道なきを行く わが青春に小説「教育者」ありき』 西田書店 1991年

添田知道 『流行り唄五十年 唾蟬坊は歌う』（小沢昭一 解説・唄）朝日新聞出版 2008年

「籠の鳥」

いま生きているとすると、110才だが、わずか31才で亡くなられたという。彼の作品で、いまでもよく知られているのがこの曲と、歌唱のみであるが「船頭小唄」であろう。この2曲は、いまでもよく全ジャンルの有力な歌手たちが、自分のアルバムに納める。言わずもがなの、名歌なのである。ユーチューブで、はじめて彼の歌声を聴いたが、その甲高い声と土俗的な歌唱にビックリした。唄の内容から、洒脱な遊び人をイメージしていたのだ。残っている写真も、田舎の小さな店の主のような、垢抜けないジャガイモのような風貌である。しかし、その歌唱力は第一級とっていいだろう。機器と技術の未発達な時代に、これだけの歌唱を記録できるのだから。一番あたりの歌詞は、短歌ていどに短いが、なんと13番までである。

逢いたさ見たさに 怖さを忘れ 暗い夜道を ただ一人---ままにならぬは 浮世の定め 無理に逢うのが 恋じゃもの---

(収集プロフィール)

鳥取 春陽（とっとり しゅんよう、1900年12月16日-1932年1月16日）大正時代の街頭演歌師。街頭演歌師の立場から洋楽の手法をもって、民衆歌謡を創作した。

*日本におけるコミックソングの歴史

俗謡は各地で市井の人々が通俗的に歌われる歌である。民謡がその土地に密着し同じ歌詞で伝えられるのに対し、俗謡は歌詞を変え地域を越え、時には専門の歌い手や芸者などにより技巧化され流行する。俗謡にはもともと風刺や猥雑なコミカルなものも多かった。民謡であっても、本歌は変えないまでも、歌詞その物はどんどん新しいものが作られる例も多い。

明治時代には軍隊、工場の労働者や学生の寮など地方からひとが集まる場所で唄われ[替え歌](#)が作られるようになりやがて全国的に広まる。『デカンショ節』や『炭坑節』、21世紀になってもカバーされる『ズンドコ節』、八代亜紀の『舟唄』で引用された『ダンチョネ節』は俗謡を起源とする歌である。

明治時代に流行したものに壮士演歌（そうしえんか）がある。壮士節ともいう。壮士演歌は戦後の演歌とは全く違い政治や世相を鋭く風刺した歌である。もとは自由民権運動を啓蒙するというまじめなものであったが、面白おかしく歌う者が出て流行する。中でも有名なのは川上音二郎の「オッペケペー節」である。他に『ひとつとせ節』『やれ節』などがある。明治の中頃から大正になると地方から都市へ出てきた学生がアルバイトで演歌を歌うことが多くなり書生節と呼ばれた。街頭で演歌を歌う姿は昭和初期までは見られたがレコード盤が普及するにつれ姿を消す。

経歴

岩手県新里村（現在の宮古市）出身。本名：鳥取 貴一（かんいち）。「籠の鳥」を作曲し、演歌師・作曲家として一世を風靡した。また、ヒコーキ印の帝国蓄音器商会で吹込んだ「船頭小唄」は、鳥取春陽の街頭演歌師としての声価を高めた。1923年、関東大震災後、活動拠点を大阪に移し、歌手兼作曲家として活躍。大正後期、鳥取春陽は絶頂期を迎えた。「すたれもの」「赤いばら」などが街頭やカフェで流れた。1926年、日本蓄音器商会傘下のオリエントレコード専属

となる。昭和に入るとジャズのリズムを艶歌に取り入れ斬新な曲を創作した。オリエント、コロムビア、ニッポノホンをはじめ、名古屋のツルレコード、大阪のニッソーレコード、東京のトンボレコードなどのレコード会社で多くの流行小唄を発表した。特に「浅草小唄」は全国区のヒット曲となり、春陽の内縁の妻山田貞子が歌った「思い直して頂戴な」も関西地方で流行した。その頃、春陽とコンビを組んでいたのが、後のテイチクで活躍した楠木繁夫である。楠木は当時、黒田進の名前で歌っていた。1932年、病をえて31歳の生涯を終えた。

* 船頭小唄が吹き込まれたのは大正十二年で、当然ラップ録音であります。十年に野口雨情が作詞、中山晋平が曲をつけたものです。鳥取春陽は岩手出身、あの「籠の鳥」や「シーハイルの歌」の作曲者でもあります。また我が国最初の「レコード会社専属歌手」でもあります。

* 「籠の鳥」古き懐かしの時代の男と女の浮世を垣間見ることができる歌です。

* (二木紘三のうた物語より)

大正時代の大ヒット演歌『浮草の旅』（詞・曲 鳥取春陽）のメロディに、第二次大戦後、林柁次郎が新しい歌詞をつけたもの。歌声喫茶やスキー宿などで、多くの若者たちに愛唱されました。

林柁次郎は明治31年（1898）、青森県五所川原の生まれ。東奥日報の記者や役員として働き、歌人・俳人としても、多くの作品を遺しています。

シーハイルは「スキー万歳」といった意味のドイツ語で、スキーマー同士がゲレンデや雪山で交わす挨拶。

「籠の鳥」は、大正末期から昭和にかけて一世を風靡した大ヒット歌謡。作曲者は天才的演歌師と呼ばれた鳥取春陽。彼は、ヴァイオリンの弾き語りをしながら全国を回る街頭演歌師でしたが、この作品がレコード会社の目にとまり、大正11年（1922）にレコードに吹き込みました。歌いやすいメロディのため、すぐに多くの人びとに愛唱されるようになりましたが、とくに大正13年（1924）に大阪の映画会社・帝国キネマが悲恋物語『籠の鳥』として映画化すると、爆発的な流行となりました。小学生や舌のよく回らない幼児までもが歌うようになったので、歌唱禁止運動まで起こったと伝えられています。

代表曲

『復興節』 作詞 添田さつき／作曲 添田さつき

『籠の鳥』 作詞 千野かおる／作曲 鳥取春陽

『赤いバラ』 作詞 野口雨情／作曲 鳥取春陽

『舟出の唄』 作詞 北原白秋／作曲 鳥取春陽

『馬賊の唄』 作詞 宮島郁芳／作曲 鳥取春陽

『みどり節』 作詞 添田唾蟬坊／作曲 鳥取春陽

『浮草の旅』 作詞 鳥取春陽／作曲 鳥取春陽

『さすらいの唄』 作詞 鳥取春陽／作曲 鳥取春陽

『浅草小唄』 作詞 徳永天露／作曲 鳥取春陽

『恋慕小唄』 作詞 松崎ただし／作曲 鳥取春陽

『望郷の唄』 作詞 鳥取春陽／作曲 鳥取春陽

『君を慕いて』 作詞 鳥取春陽／作曲 鳥取春陽

塩原の歌唱は、聴きとりやすく癖の無い、渋く低めの声。他の演歌師と比べて、曲とのズレもあまりなく、音程もしっかりしている。

代表曲には『平和節(ジョージアソング)』、『金色夜叉』、『春爛漫の花の色』などがある。京都オリエントがニッポノホン大阪支社レーベルになってからは新録音発売は途切れたが、1934年（昭和9年）、大阪ニッポーで吹き込んだ『兵隊ぶし』で再びヒットを放つ。片面は美ち奴とデュエットの『水兵ぶし』で、塩原はこの2曲を最後に引退する。1937年（昭和12年）3月24日、敗血症のため56歳の若さで亡くなった。

*森山加代子（1961年発売。シングル「パイのパイのパイ」。同年公開の映画『アワモリ君売出す』劇中歌）

元々のメロディーは、ヘンリ・クレイ・ワークによって作曲された「ジョージア行進曲」（Marching Through Georgia）で、アメリカ南北戦争時のウィリアム・シャーマン将軍の海への進軍の様子を描いた行進曲である。添田によって作詞される以前から、明治25年(1892年)に「ますらたけを」の題で国文学者・東宮鉄真呂の作詞による軍歌が販売されたり、救世軍が街宣活動で演奏するなど広く親しまれていた。これに添田が改めて歌詞をつけたものが「パイノパイノパイ」である。資料によっては作曲者も添田知道（添田さつき）や神長瞭月とされていることがあるが正確ではない。日本では原曲よりも「パイノパイノパイ」での知名度が高いため、ブラスバンドがジョージア行進曲を演奏したところ、卑俗な歌を演奏するとはいかなものかと苦情が来たというエピソードもある。

売文社に勤めていた添田がある日「のんき節」の掲載許可を貰いに父・添田唾蟬坊の元を訪ねると気まぐれに、演歌を一つ作って見ないかと言われた。当時流行りつつあった洋食屋のメニューを羅列したような仮歌であったが、唾蟬坊がメロディーを口ずさむと、幼少期に神奈川県大磯の実家に預けられていた時に遊び仲間から「ますらたけを」のメロディーで囃し立てられた記憶が急に蘇り、小説家志望で歌は嫌いでなかったこともあり、作詞経験はないがつい釣り込まれてしまった。その席上、唾蟬坊にはどうせ浮世は出鱈目だという人生感があり、口癖になっていてその場でも出た。そうして「デタラメ」が「ラメ」となり「ラメチャン」となって囃子言葉はスラスラと決まり、全体は宿直の一晚で書き上げた。このとき添田知道はわずか19歳だった。

明治中頃の丸の内は三菱ヶ原と呼ばれる草の生い茂る原野であったが、明治27年に丸の内最初のオフィスビルである三菱一号館が竣工したのを皮切りに、東京府庁舎、東京駅の建造が始まり、原野からわずか20数年で急速に近代化を遂げた東京の名所・古跡・風俗が歌い込まれているのが特徴である。「パイノパイノパイ」の大流行につれて新たな歌詞が求められ、京阪神・中京・吉原の風俗、更に第一次世界大戦の戦後処理のためパリ講和会議に全権として参加した元老・西園寺公望が愛妾や灘萬の店主を伴ったことが大新聞に取り上げられたこと、会議の結果としてドイツが所有していた山東省の権益や南洋諸島の委任統治権を得た戦勝気分を背景として添田が改詩したものが「平和節」の名で大正8年に発表された。

代表曲

『春爛漫の花の色』 作詞 矢野勘治、作曲 豊原雄太郎 1916年（大正5年）

『嗚呼玉杯に花受けて』 作詞 矢野勘治、作曲 楠正一 1916年（大正5年）

『夜半の追憶(男三郎の歌)』 作詞 武島羽衣、作曲 田中穂積 1917年（大正6年）

『平和節(ジョージアソング)』 作詞 添田さつき、作曲 ヘンリー・ワーク

1917年（大正6年）

『金色夜叉』 作詞 宮島郁芳、作曲 後藤紫雲 1918年（大正7年）

『白菊』 作詞・作曲 神長瞭月 ※商船学校寮歌、山本久光との歌唱

1918年（大正7年）

『水兵ぶし』 作詞 伊藤松雄、作曲 清美生二 ※美ち奴とのデュエット 1934年（昭和9年）

『兵隊ぶし』 作詞 伊藤松雄、作曲 水谷ひろし 1934年（昭和9年）

脚注

*1934年、書生節は「流行青年歌」「流行青年節」と表記されている。

8曲ばかり、聴いてみた。鳥取春陽の声から、甲高さと土俗的な風味を半分差し引いた感じの声で、歌唱法も春陽に近く、唄うというより、謡う、という感じだ。ちょっとした物語のような、長い歌詞である。私は、歌謡としても、音楽としても、あまり優れているとは思えないが、当時の世相に響くものがあったのだろう。

ああ 夢の世や夢の世や 今は三年の其の昔 時も弥生の半ば頃 いと懐かしき父母や 十有余年のその間 朝な夕なに---

*「松の声」は女学生墮落の唄として知られ当時大ヒットした。勉学のために上京した女学生が、親や教師の注意にもかかわらず学業をおろそかにして男と恋愛、親からの仕送りを断たれ、子をはらんだ後に男にも捨てられて自殺するまでの経過を叙事的に唄ったもので、三流週刊誌記事の弾き語りであった。

(収集プロフィール)

神長 瞭月(かみなが りょうげつ、1888~1976) バイオリンを独学で学んで演歌の伴奏楽器として初めて使用した、バイオリン演歌の先駆者(パイオニア)。

上京して縁日に読売(当時の演歌師は唄いながら歌詞を刷り込んだパンフを客に売った)を聞きに行き、刺激されて処女作「松の声」を作詞作曲した。

* (緑の森 より) 自由民権運動の壮士たちの演説・政治運動が明治二十年の保安条例により押さえ込まれ、東京を追放された壮士たちが民権思想の普及を従来の演説だけではなく、演劇や歌や落語や講談でおこなうこととなった。それがいわゆるいっぽうの新派劇である。こうしたイキサツゆえに《演歌は、歌をうたってきかせる芸としてはじまったのではない。演説代わりの歌の文句を書いた本を売って、その文句による啓蒙運動をしようというわけだった。演歌をうたう者は、はじめは本を売るところから演歌屋といわれた。のちに演歌師となった。それを文字を変えて艶歌師というようになったのは明治末頃からである。・・・当節の演歌・・・と明治の演歌とはまったく関係がない。レコード演歌は演歌よりも、演歌とは別の流しの歌うたい、たとえば歌をうたってきかせる法界屋の系列なのである》(加太こうじ) 徐々に政治演説口調のものから、きいて面白いうたい方、うたいやすく親しみのあるメロディーへと変わってゆき、あのヴァイオリンをキコキコ弾きながら街頭で歌っている演歌師の登場となった。(悲しからずや幾十年...) 日清日露の、(日清談判破裂して...) であり、今月今夜のこの月の(熱海の海岸散歩する...) (デカンショデカンショで半年くらす...) (朝鮮と満州と境の鴨緑江...) (青島(ちんとう)の山から指差して...) (今なるラッパは八時半...) ああ(ナッチョラン)(ナッチョラン)である。この2枚組みのアルバムは、バイオリンを独学で学んで演歌の伴奏楽器としてそれを初めて使用した先駆者(パイオニア)である神長瞭月のものであり、よわい九十になんなんとする時の音盤である。

*三年(みとせ)の後に汝か顔見るが我等の楽しみぞ 錦を飾りて帰る日を指折り数へて待つべしと

情も深き言の葉に行くも止るも涙川 小袖の露も未だ乾(ひ)ぬに許し給はぬ不義の道

故郷の空を後にして上り来しより早や三年一嘸や涙にむせぶらん免し給へや父母の君

来歴（帝大生ゆめじの大道芸日記 より）

1888（明治21）年6月：栃木県 塩谷生まれ。

1904（明治37）年：苦学しようと上京し神田に下宿。

1907（明治40）年：浅草電気館の活動写真の幕間にヴァイオリンの基本演奏を習い、「残月一声」を作曲しヴァイオリンに載せて観衆の前ではじめて披露した。人気を得て演歌師を生業となす。

1907（明治40）年「残月一声」「松の声」、1908（明治41）年ハイカラソングを作詞する。

1913（大正2）年：「松の声」「残月一声」などの演歌を日本ではじめてレコードに吹き込み市販した。

1918（大正7）年：神田で独立音楽会を開設しマンドリンとヴァイオリンの教習をする。

1924（大正13）年頃：演歌の作詞作曲をする傍ら、発明の道にも手を染めた。

1976（昭和51）年2月：「元祖・神長瞭月」－これが基本演歌だ－のLP2枚組（45曲）をビクターよりリリースした。

渋谷 白涙

名前はどこかで見たことのある方だが、ほとんど知らない方である。3曲ばかり、聴いてみた。流浪の旅、船頭小唄、濱千鳥と、いづれも鳥取春陽との共唱。けれど、春陽の甲高い声に隠れて？、白涙の声がよく判らない。もうひとつ考えられるのは、春陽に似た声のため区別がつかない、ということ。ともあれ、私の入手できる、現時点の資料では、その歌唱についての是非がよく判らなかった。

この曲は、多くの一流歌手が歌っているが、森繁久弥の歌唱（音楽的には、正しくないのだが）が一番いい。

おれは河原の 枯れすすき 同じお前も 枯れすすき どうせ二人はこの世では 花の咲かない 枯れすすき----

（収集プロフィール）

渋谷 白涙（しぶや はくるい、1 x x x ~ 1 9 x x）作詞・作曲家、演歌師。

*主な作品

「ジンジロゲーとチャイナマイ」歌唱：秋山楓谷・静代

武田信義・渋谷白涙：作詞。外国曲。よく口ずさんだ歌だが、意味不明の代表格。元々はインド方面の田植え唄？

「流浪の旅」

年代不明（大正10年(1921年)流行）TOKYO RECORD 東京蓄音器株式会社 作詞：不詳 作曲：不詳 唄：渋谷白涙・鳥取春陽

「船頭小唄」

年代不明（大正年間）作詞 野口雨情 作曲 中山晋平 書生節 唄：渋谷白涙・鳥取春陽

*帝大生ゆめじの大道芸日記 より

演歌：

演歌の「演」は演説の「演」である。演歌が生まれたのは、明治20年頃で当時盛んだった自由民権運動の産物である。街角に立ち、演説を唄にして七五調で唄ったのが始めである。当時唄っていた者は民権論者の壮士と呼ばれた人たちなので彼らが唄う唄は「壮士節」といわれた。自由民権思想を広める目的で始めた素人演劇が壮士芝居である。

オッペケペー節：

川上音二郎が唄って一世を風靡した、今でいえばその時の政治や社会を風刺したラップである。陣羽織に後ろ鉢巻、日の丸の扇子をかかげた出で立ちで唄い大評判になった。100年前の声が録音されて残っている。

「権利幸福嫌いな人に自由湯（じゆうとう）をば飲ませたい。オッペケペ、オッペケペッポー、ペッポッポ」

明治33年（1900）にパリ万国博覧会の会場にて公演。（甦るオッペケペー1900年パリ万博の川上一座 CD 東芝EMI）

書生節：

明治の中ごろから学問を志して東京へ出てくる若者が多くなった。地方より上京し勉強する苦学生を歓待する風潮もあり、演歌は学資をかせぐための書生のアルバイトとして夜間にできることから都合がよく、苦学生の演歌師が増えた。実際には墮落学生、てんぷら学生が多かった。この頃から演歌師が袴をはく習慣ができたらしい。

添田唾蟬坊は民衆の抵抗詩人であり、金権政治や日清・日露の戦勝におごる世相を風刺し、皮肉った。ラッパ節、マック口節、のんき節などの歌本が飛ぶように売れた。今流に言えば、自作自演の反戦・反体制、あるときはコミックフォークシンガーであった。

バイオリン演歌（大正演歌）：

明治43年(1910)頃、演歌師、神長瞭月がバイオリンを独学で学んで演歌の伴奏楽器として初めて使用した。「松の声（女学生墮落の歌）」を歌い人気が出た。活動写真（無声映画）で楽隊が伴奏に使っていたバイオリンが小さくて軽く持ち運びに便利、その上人目も引くことができると考えた。集客力を高めるためにバイオリンでメロディや重音を出して歌った。演歌師は歌本を売るのが目的であったが、バイオリン演歌師はそうでない演歌師と比較して本の売上が数倍に上がったという。

そして、演歌といえば、書生姿でバイオリンを持つスタイルが定着した。勉学のために学費を稼ぐ苦学生として同情させて歌本を売っていたがほとんどは墮落学生であった。また、当時はバイオリンのことをオリンといていた。

バイオリン演歌師は門付け芸のように歌を歌って金をもらう芸ではなく、街頭や縁日で歌本の販売促進のために歌を歌った商人（あきんど）、大道香具師（やし）である（てきやの部類）。

どんな種類の学校に通学する学生が多いかというと、多くは専門学をやっている学生が多数を占めていた。正則英語学校（正則学園高等学校）、国民英学会、研数学館（名門予備校だったが予備校から撤退、本館は大正大学が使用）、工手学校（工学院大学）、鉄道学校（岩倉高等学校）、慶応、早稲田、明治、法政大学などの学生であった。（ ）は現在の状況。のんき節を歌って有名になった演歌師、石田一松は法政大学をちゃんと卒業し、戦後は衆議院議員となったタレント第一号である。

バイオリン演歌は昭和初期まで続いたが、バイオリンは重音のみで和音が出せないため、その後演歌の伴奏楽器はご存知のようにギター、アコーディオンに変わっていき、バイオリンは消えていく。

*書生芝居(壮士芝居):

明治中期、自由党の壮士や青年知識階級の書生が、自由民権思想を広めるために始めた演劇。明治二一年（1888）に角藤定憲(すどうさだのり)、同二四年に川上音二郎が一座を興した。のち、新派劇に発展。

書生羽織（しょせいばおり）：

普通より丈の長い羽織。明治中期以後、書生が用いて一般にも流行した。

書生節:

明治六年（1873）ごろからはやりだした流行歌。「書生書生と軽蔑するな、末は太政官のお役人」が原歌。「書生書生と軽蔑するな、大臣参議もみな書生」等。

*明治・大正・昭和のプロレタリアート音楽

「哀歌集 蟹工船・あきらめ節」コロムビア

歌にはその時代の思いが。「蟹工船」をはじめ、社会的弱者の苦しさや哀しさを歌った歌ばかりを収録。過酷な労働を歌った「蟹工船」、万事金が解決の世の中を歌った「金金節」などを収録。

蟹工船 / 村田英雄

籠の鳥 / ちあきなおみ

船頭小唄 / 森繁久彌

金金節 / 小沢昭一

コロッケの唄 / 鈴木やすし, 南地みつ春

五木の子守唄 / 島倉千代子

王将 / 村田英雄

あきらめ節 / 金子潔

残月一声 / 桜井敏雄

スカラーソング / 桜井敏雄

パイノパイノパイ / 金子潔

デモクラシー節 / 秋山ふう谷, 秋山静代

オッペケペー節 / 神長瞭月

東雲節 / ストライキ節 / 浅草ゆめ子

ダイナマイト・ドン / 桜井敏雄

どん底の唄 / 織井茂子

流浪の旅 / 渋谷白涙, 鳥取春陽

メーデーノウタ / 日本合唱協会

あゝ金の世や / 桜井敏雄

*歌と音でつづる明治(2008)

[キング・アーカイブ・シリーズ]

ドキュメンタリーアルバム。"史実に忠実に"をコンセプトとして、広く大衆の生活に密着した流行歌のみならず、効果的な街頭音もふんだんに収録。聴けば明治にタイムスリップ! 当時を探る歴史資料としても一級品。1967年作品。

Disc 1

1. 維新マーチ / キング鼓笛隊

2. 宮さん宮さん(とんやれ節) / キング男声合唱団

3. ノーエ節 / 浅草一郎

4. 書生節(よさこい節) / 河原晃

5. 孝女白菊 / 三橋少年民謡隊

6. ダイナマイトどん / キング男声合唱団

7. かぞえ唄 / キング日本音楽合奏集団

- 8.ノルマントンの歌/ 田谷力三
- 9.チョンコ節/ キング和洋合奏団
- 10.やっつけろ節/ 佐々木孝丸
- 11.九連環/ キング合奏団
- 12.法界武士/ 田浦美津路
- 13.新ホーカイ節/ あさの明花
- 14.欣舞節「干城」/ キング男声合唱団
- 15.拳骨武士/ 楠トシエ
- 16.やっちょろまかせ/ 中村雁治郎
- 17.士気之歌/ 田浦美津路
- 18.四季の歌/ あさの明花
- 19.オッペケペー歌/ 佐々木孝丸
- 20.てまりうた/ 三橋少年民謡隊
- 21.小川少尉の歌/ 桜井敏雄
- 22.金太郎/ キング日本音楽合奏楽団
- 23.ドンドン武士/ 桜井敏雄
- 24.ストライキ節(東雲節)/ あさの明花
- 25.デカンショ節/ 小池朝雄
- 26.鉄道唱歌/ キング合奏団

Disc 2

- 1.軍艦マーチ/ キング吹奏楽団
- 2.戦友(婦人従軍歌)/ ヴォーチェ・アンジェリカ
- 3.ラッパ節/ 芳村伊四郎
- 4.凱旋/ ヴォーチェ・アンジェリカ
- 5.荒城の月/ 村岡実
- 6.松の声/ 小池朝雄
- 7.ああ金の世/ 島田正吾
- 8.ああわからない/ ボニージャックス
- 9.ハイカラ節/ 田谷力三
- 10.七里ヶ浜の哀歌(真白き富士の嶺)/ 井口小夜子
- 11.金色夜叉の歌/ あさの明花
- 12.増税節/ 榎本健一
- 13.天然の美/ キング吹奏楽団
- 14.夜半の追憶/ 東海林太郎
- 15.袖しぐれ/ 岸田今日子
- 16.スカラー・ソング/ 榎本健一
- 17.思い草/ 井口小夜子

- 18.マガイイソング/ 森繁久彌
- 19.むらさき節/ あさの明花
- 20.都ぞ弥生/ ボニージャックス
- 21.千鳥節/ 浅草一郎
- 22.新ドンドン節/ 榎本健一

まだ白黒テレビが一般的だった、昭和40年頃、漫才やコントに、この曲はよく使われていた。ただ、芸人の発言やクレジットでは、デカンショ節、だった気がする。その後、徐々にあまり耳にすることは、無くなってきたが。深い意味も知らず、聴いてきたが、どことなくコミカルで、元気のよい唄、と感じていた。お花見などの場でも、手拍子で唄っている人々がいた。

(収集プロフィール)

倉持 愚禪 (くらもち ぐぜん、1xxx~19xx)

大阪の演歌師の元締めの人。資料不足のため、詳細は不明。

*梅丘歌曲会館 より

丹波・篠山の民謡・デカンショ節に乗せて延々と歌われるこの歌、大正の半ば頃に庶民の間でも盛んになった、普通選挙運動にあわせて大阪の演歌師・倉持愚禪が詞を書き、全国で広く歌われたといいます。当時は選挙権はある一定以上の租税を納めている人など、ごく限られた人だけのものでした。「親のすねかむヤブ蚊にくれて」とあるように世襲制で受け継がれていたことなどもあり、国民の総意を反映するものではありませんでした。

大正のはじめは第一次大戦の特需などもあり、日本全体が急激に豊かになった時代。一部の人間だけで政治を決められてしまうことに対する不満も高まった時期ではあるのでしょう。

翻って普通選挙が実現した昭和の世ではどうだったのでしょうか。さらに最近に至っては投票率が20・30%などというような選挙はざらで、この歌に聴かれるような熱気はなんだったのだろう、と思えてなりません。

当時の農民や工場労働者、下級兵士や炭鉱夫たちがこんなに切実に願っていたのなら、その子孫が得られた権利を粗末にしてはバチが当たりますね。

歌詞にはあまり解説は必要ないかと思いますがひとつだけ補足。最後の節の「萬機公論」というのはなんと明治元年、維新の新政府が出した「五箇條ノ御誓文」の最初に出てくる「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」のことを言っています。

歌われるうちに演歌師たちによって次々と新しい歌詞が付け加えられていったであろうこの歌、ここで掲げたものがオリジナルというわけでもないと思います。この歌詞は大正8年に演歌師・秋山楓谷が妻・静代とのデュエットで吹き込んだものから(Columbia・ニッポノホン原盤)。彼は危険思想の持ち主と言われて治安当局からも監視されており、その後自ら死を選びます。まさに命を賭けた歌。お世辞にも歌は上手とは言いかねますし、これだけ延々と同じメロディが繰り返されると聴き疲れてしまうところもありますが、歴史のメッセージとしてじっくり聴くことも決して悪くありません。この熱が日本からいったいつ消えてしまったのか(普通選挙施行が大正14年(1925)、しかし女性の参政権はそれから更に遅れ戦後を待たねばなりませんでした。

*NATURAL FRONT より

デカンショ節自体もそんなに古い歌ではないようで、流行は明治の末頃のようなですね。

「大正」年間、デモクラシー思潮の高まりにつれ社会主義が活気を取り戻し、労働運動が盛んになっていった。そんな中、大阪の演歌師の元締めの人であった倉持愚禪が丹波篠山の民謡『

『デカンショ節』のふしに乗せうたい広めたのが『デモクラシー節』だ。1919年に爆発的に起こった普選運動に刺激を受けた演歌師達は、各々その思想を歌に込め表現した。『チャクライ節』のふしに乗せてうたわれた啞蝉坊作詞の『デモクラシー節』は同名異曲。

危険思想の持ち主と特高からマークされ、常に尾行が付いていた、演歌師秋山楓谷が妻静代とのコンビで吹き込んでいる。

兵庫県多紀郡篠山町の人たちが盆踊り唄としてうたってきたのがこの『デカンショ節』。源流は河内地方の『河内音頭』や九州の『ハイヤ節』などと同系の盆踊り口説節である。

1907年頃、青山藩主青山忠誠が開設した鳳鳴塾の出身者が多数東京へ出て、学生仲間の間ではやり唄的存在となっていた。また、「大正」年間には三味線の手がつけられ花柳界でも大ヒットした。“デカンショ”をデカルト・カント・ショーペンハウエルの略とする説は旧制高校の学生のこじつけで、“ドッコイショ”が訛ったものである。

「デモクラシー節」 大正8年頃#原曲 デカンショ節（詞 倉持 愚禅 編詞 中川 敬）

労働神聖と口では誉めて コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

稲は誰が刈る 木は誰が樵る コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

親の脛噛む 藪蚊にくれて コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

汗から絞らぬ 租税があるか コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

雲雀鳴いても 天まで届く コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

万機公論と宣うじゃないか コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

どうぞリベラルと口では言っても コリャコリャ

おらに選挙権 なぜくれぬ ヨーイヨーイ デモクラシー

デカンショ デカンショで半年暮らす コリャコリャ

あとの半年寝て暮らす ヨーイヨーイ デカンショ

*大正14年の普通選挙法施行までは選挙権は一部の金持ちたちのものでした。

女性に至っては太平洋戦争後まで権利がなかったのです。大正の半ば頃に盛り上がった普通選挙を求める運動の中で広く歌われたと言うこの歌。

残された映像がすくなく、入手できた資料は少し。演歌師らしい、太く、威勢のいい声。浪曲調の語り、も上手そうだ。

三府の一の東京で（ああどっこい）/波に漂うますらおが/はかなき恋ににさまよいし/父は陸軍中将で/片岡子爵の長女にて（ああどっこい/桜の花の開きかけ/人もうらやむ器量よし/その名も片岡浪子嬢/（ああちよいと）海軍中尉男爵の/川島武男の妻となる/新婚旅行をいたされて/伊香保の山にワラビ狩り（ああどっこい）/遊びつかれてもろともに/我が家をさして帰らるる/（ああちよいと）武男は軍籍あるゆえに/やがて征くべき時は来ぬ/逗子をさしてぞ急がるる/浜辺の波のおだやかで（ああどっこい）/武男がボートに移るとき/浪子は白いハンカチを（ああどっこい）/打ち振りながら/「ねえ、あなた早く帰って頂戴」と/仰げば松にかかりたる/片割れ月の影さびし/実にまあ哀れな不如帰」

（収集プロフィール）

大江 しげる（おおえ しげる、19XX～??）元東京演芸協会所属の、演歌師。

*昭和の初期まで縁日などで親しまれた大道芸「のぞきからくり」、のぞき穴をのぞくと押絵と凸レンズが作り出す立体的な世界が広がっている。「のぞきからくり」は、映画やテレビの普及によって完全に消えてしまい現在は博物館でしか見ることができない。

のぞきからくり「不如帰」（ホトトギス）実演：昭和ロマンを楽しむ会

「不如帰」は徳富蘆花（とくとみろか）の不朽の名作で1898年（明治31）から1899年まで「国民新聞」に連載された。明治時代のベストセラー小説。

「人間はなぜ死ぬのでしょうか 死んでも私はあなたの妻ですわ、未来の後までも」

「八千八声 ないて血を吐くほととぎす」

落語の「天王寺詣り」に天王寺の境内でやっているのぞきからくり「不如帰」の口上が入っている。同じ不如帰でも各地によってさまざまな文句とからくり節があった。

あらすじ：片岡陸軍中将の娘浪子（なみこ）は、海軍少尉川島武男（たけお）と結婚したが、結核にかかり、家系の断絶を恐れる姑によって武男の留守中に離縁される。二人の愛情はとだえなかったが、救われるすべのないまま、浪子は、もう女になんぞ生まれはしないと嘆いて死ぬ。

*懐かしいのぞきからくり（不如帰） 大江しげる談

大江しげるは東京演芸協会に所属していた芸人で昭和の末期まで活動していた時事演歌の演歌師であった。寄席芸人で「のんき節」の替歌が得意だった。

子供の頃、縁日で一番楽しんだもの、「のぞきからくり」の思い出と「不如帰」の一節を語っている。外題は事件ものが多かった。大人が五銭、子供が三銭だったそうである（昭和初期）。

大江しげるは昭和27年から玉川スミとコンビを組んだこともある。

大江しげる（演歌師、漫才師）

*帝大生ゆめじの大道芸日記より

昭和の末期まで活動していた時事演歌の演歌師、寄席芸人で「のんき節」替歌が得意だった。昭和27年から玉川スミとコンビを組んだこともある。また、三遊亭小円朝の母方の祖父が大江しげ

るとのことである。

もちろん、書生節の「ああ踏切番」なんかも歌っていた。桜井さんたちと比較するとバイオリンは上手ではなかった。歌の間に効果的に音を入れるという”鳴り物入り”であった。

下ネタから政治ネタまでいろいろなのんき節を歌っていたが、政権党にも野党にも厳しく皮肉っていた。今考えると、社会党の末路を予言していた。

社会党にはじめて 女の委員長 土井さんに期待が集まります

たか子さんは未だに独身ですが 立派な黨員生めますか

ハハ のんきだね

歌 街頭版」(大江しげる編、添田知道監修)より船村徹さんの寄稿

「命ある限り演歌を」 船村 徹

いや驚きですね、70歳を超えたご高齢で、未だに”演歌”を歌い続ける大江先輩の存在は――。あえて先輩と言わして頂いたのは、私自身が、それこそ大江さんの先輩筋にあたる、のんき節の故石田一松先生(元衆議院議員)のヒキで、音楽学校在学中に銀座で演歌師(バイ)をさせてもらっていたからなんです。

時の権力の横暴に抗し、演歌を持って糾弾するのではなく、歌に託して大衆の喚起を促したのが、”演歌”の起源ですが、大江さんは今もその精神(こころ)をうしなっていない――どころか、折にふれ時に応じて風刺小唄”のんき節”を創作し、歌い続けていらっしゃる。この反骨は今どき大変貴重なものだ、と尊敬している私も一人です。

”無形文化財”とも言うべきこの大江先輩の存在を、同好の志のお力で長く後世に伝えて頂ければ、後輩の一人としてこんな嬉しいことはありません。

*三遊亭小圓朝(小円朝)談話

親父(三代目三遊亭円之助)が土日になると後樂園に野球を見に連れてってくれるんです。――中略――

ご承知の通り父は噺家ですが、母も芸人の家庭なんです。祖父母が「大江しげる・笙子」という漫才をやっていました。漫才をやめてからも祖母はお囃子をやっていたんです。だからそういう家族なんですね。親戚が集まるとにぎやかで、噺家のあたしが黙っちゃう。

*「石動三六日記 寄席編」より

おそらく1976年だと思うんですけどね。初めて浅草の松竹演芸場に行きました。多分、当時は落語より色物の方が面白かったんでしょう。で、色物専門のこの寄席に来たわけですが、このときの上席は漫談家を中心にした東京演芸協会というグループの特別興行(今でも東洋館の中席がそうですが)。手元にあるチラシによると、出演者はアダチ龍光(奇術)・黒田幸子とその一行(民謡)・筑波僑一郎と剣竜会(殺陣)・悠玄亭玉介(花街うらばなし)・大江しげる(時事演歌)・三遊亭歌夫(漫談)・鏡味小仙社中(太神楽曲芸)・サムライ日本(殺陣とお笑い)・林家一楽(紙切り)・松旭斎小天華(奇術)、これに桜井長一郎・宮尾たか志・牧伸二・小野栄一・早野凡平・佐々木つとむという当時の売れっ子が交互出演。パツとしないメンバーでしたね。

大江しげるという老芸人だね。明治時代の書生姿、袴に高下駄でバイオリン弾きながらの時事

演歌。「のんき節」を唄ってました。

*3LPBOX/ 添田知道・大江しげる「歌でつづる鉄道百年」

株式会社 イメージファクトリィ 効果音

★ NO-706「メインストリートのならず者・大道芸NO-2」(0323)

14.物産アメ売り。明治～昭和初期(0323)

15.バイオリン演歌、大江しげる。パイノパイノパイ(0323)

16.バイオリン演歌、大江しげる。船頭小唄(0323)

17.バイオリン演歌、大江しげる。郭の歌(0323)

*漫才師 大江茂(しげる) : 前芸名 : 砂川捨夫、後に凸凹ポップ・ホープのポップ

*玉川 スミ:昭和27年 大江しげるとコンビを組み四年ぶりに有楽町ビデオホールの舞台に立つ玉川一郎先生の勧めで芸名を「玉川一恵」とする

*世相に流れゆく演歌師 演歌四十年の“小松ツちゃん”(新宿)

東京は日本ではないと外人にいわれるたびに私は、いや東京こそはまぎれもなく日本なのであると答えることにしている。都には国のすべての要素が集結する。

*大江しげるさんはずいぶん前になくなりました。

あまり音源が残ってないのが残念ですね。

秋山 楓谷

妻の秋山静子（静代 名義もあり）との、共唱を2曲聴いてみた。ニッポノホン版の「ジンジロゲーとチャイナマイ」。いわゆる、戯れ唄、囃し唄で、曲としての意味や物語は、ほとんど汲み取れない。源流は、労働歌らしいが。コミカルな唄、の定評があるが、改めて聴いてみると、意外にも思ったほどは感じられない。楓谷の声は、やや甲高く、太い。しぶとい感じもある。演歌師に向けた、資質といえるだろう。ナショナル版の、ヤッコラヤノヤー節（書生節）では、静子の方の歌唱が強くて、楓谷の歌唱が隠れ気味。まあ、歌唱も含めて、出来は悪くないが。

この曲は、昭和37、8年ころ巷によく流れた。当時の人気歌手、森山加代子のリメイク版である。意味不明で、コミカルなテイストは変わらなかったが、曲の泥臭さはぐんと薄れ、歌詞も、オリジナルよりも明確な世界を作り出している。私は、バナナの叩き売り、の啖呵と同類のような印象を受けていた。源流は、インドの田植え唄らしい。

「ジンジロゲーとチャイナマイ」歌唱・秋山楓谷&秋山静子

ジンジロゲーやジンジロゲー そーれ どんがらがったの ホーレツラッパノ ツーレツ マージュリン----

（収集プロフィール）

秋山楓谷（あきやま ふうや、1 x x x ~ 1 9 x x）大正から昭和前期にかけての、演歌の歌唱・作曲者。

*ザ・20世紀 より

大正のはじめ その2（世界大戦・青島節・ノンキ節）

大正の初め頃には、東京の市内には日露戦争による廃兵がいくらかも姿を見せていた。

単独で薬を売り歩く者もあれば、数人から十余人が路傍に並び、引率の一人が口上を述べ、喜捨を乞うという形であった。

この廃兵が未だ市内に残っていた、大正三年七月（1914）、第一次世界大戦が勃発した。

日本は八月、独、欧に宣戦、十一月青島を攻略、山東に上陸した。

この戦争の影響で、日本に物資の注文が殺到、海運も飛躍的な発展を伴った。

産業は発展し、工業国日本となり、資本国としての基礎固めとなった。

これを反映しての演歌に、青島節がある。

青島節（ナッチョラン）

♪ 青島よいとこ誰がいふた うしろはげ山前は海 尾のない狐が住むそうな ぼくも二三度だまされた
ナッチョラン

中略

♪ 早く帰って頂戴と 送る浪さん逗子の浜 わたしゃお客を送る時 背中叩いて舌を出す
ナッチョラン

♪ 親も妻子もふり捨てて わたしゃ兵士になりました 泣き泣き三年つとめあげ 帰りゃわが家に雨が漏る
ナッチョラン

（全10節 唾蟬坊詞・整曲）

この大戦の好況を受けたのは、上層部と成金たちだけで、物価騰貴に民衆は喘いでいた。

♪ サアサ事だよ事だよ お金がないないお金がないよ 火鉢の引き出し茶だんすつづら
戸棚探してもないよ どうしてもないよ シマッタ " " " " 夢で拾った金がない

中略

♪ サアサ事だよ事だよ 電車の値上げに電燈の値上げ 水道の値上げに家賃の値上げ
なんぼあがっても天下は泰平 市長は万歳 メデタイ " " " " 東京市民はオメデタイ

（4節 唾蟬坊詞・調）

また、こんな歌もあった。

ノンキ節

♪ 学校の先生はえらいもんじやさうな えらいからなんでも教へるさうな
教へりゃ生徒は無邪気なもので それもさうかと思うげな ア、ノンキだね

♪ 貧乏でこそあれ日本人はエライ それに第一辛抱強い
天井知らずに物価はあがっても 湯なり粥なりすすつて生きている ア、ノンキだね

（全部出15節 唾蟬坊詞・曲）

対独欧の連合国の一員であったロシアで、革命がおこり(大正6年1月・1917)、ロマノフ王朝は崩壊し、その10月、ソビエト政権が成立した。世界で最初の社会主義国家の誕生である。これは帝国主義体制の列国にとって、驚倒に価する出来事であった。ロシア革命への干渉がにわかに列国間に議せられた。

連合軍のシベリア出兵が決するや、日本は真っ先に出兵を宣言、協力兵力の6倍もの7万3000を繰り出した。ロシア分割に発言力を強めようとの思惑からと、国内事情の悪化を対外問題にそらそうとする事情からである。

大正7年5月19日、汐留発の貨物列車が品川を出てまもなく、踏み切りで人力車を跳ね、乗客は死亡、踏切番の二人は、責任を感じ、線路上に身を伏せ、自殺した。

事件は大々的に報道され、事件当夜、現場にかけつけた都新聞(東京新聞の前名)の社会部記者は長谷川 伸であった。

その記事は他紙を抜いてすぐれたものだと、記者仲間の評判であつたという。この事件は、低賃金で苛酷な労働を強いられるという問題と、鉄道側の管理の問題、併せ社会全体の問題として各紙に取り上げられ、つぎの歌の誕生となる。

秋山 楓谷 ②

ああ踏切番

♪ 二十余年を碑文谷の 踏切番とさげすまれ 風のアしたも雨の夜も 眠る暇なき働らきの
報いは飢をしのぐのみ わずかに飢をしのぐのみ 労力の価ひ安き世の 勤めの身こそ悲しけれ
中略
今か今かと来ん汽車を 待てる二人はわれ知らず いつか睡魔の誘い来て あはれ夢路わゆきもどり
中略
とどろとどろと一筋に 鉄路を走る汽車の列 あはや間近く迫れるを あやふし夢は尚さめず
砂吹く風の忽ちに おどろき見れば凄まじや 突き来る汽車は眼のあたり 鉄路を人の血に染めぬ
二人は色を失ひて 己が職務の怠りに 人をあやめしその罪の のがれ難きを如何にせん
一人の命とつりがへに 二人の命捨つるより 外に術なし諸共に 死なんの覚悟誰か知る
あけ方近く月落ちて 雲間を漏るる月影の 消えゆく空をふるはしつ あなけたたまし汽車の笛

大正六、七年ころ(米価高騰・豆粕ソング・東京節)

明治末から騰貴つづきの米価は、当時の米価調節令、暴利取締令も物かは、

大正六年の堂島米相場平均価で、 1石 16円65銭が
七年に入って 1石 23円78銭となり
さらに七年七月には 1石 41円05銭とはねあがった。

現実に米屋の店頭では1升50銭という、驚くような値段で、民衆は米が食べられない状態になった。時の東京市長田稲次郎は、豆粕食を奨励した。「貧乏人は豆粕を食え」である。

後年のある大蔵大臣の「貧乏人は麦を食え」に似ているが。

そこで、演歌「豆粕ソング」の登場となる。

時の市長には代用食をあてがうだけで、米を食わせる知恵はなかった。

この歌の底には、その怒りが込められている。

豆粕ソング

♪ 高い日本米はおいらにや食へぬ おいらそんなもの食はずとも、よ どんなへんなもの食はされたとても
生きていられりやそれでよい
♪ 米はあがると下がるとままよ 外に南京米がないぢやなし、よ 何をくよくよ鳩豆もござる
腹はいたんでも辛抱する
♪ 米が高いとて泣くよな奴は 日本男子の面よごし、よ 何をくよくよ水のんでさへも
少しやどうかこうか生きられる
後略

(唾蟬坊詞・中山晋平曲)

この歌は直ぐ発行禁止となった。そこで作者は次のように歌詞を変えたところ、これは生き残り、街頭で大いに歌われた。

替え歌

♪ 生きたガイコツが躍るよ躍る ガイコツどんなこといふて躍る、よ やせたよせた外米食ふて痩せた
日本米恋しいといふておどる
♪ 日本生にまれて日本米が食へぬ へんな話だが嘘ぢやない、よ 豆のしぼり粕外国米を食ふて
ようよ露命をつないでる
中略
♪ ほんにエライもんぢや行きてる生きてる 生きてる証拠にや動いてる、よ 青い顔して目をくぼませて
ヒクリヒクリと生きている

普選運動 明治25～大正14(1892～1925)におこなわれた男子普通選挙権の獲得運動。30年にわたる運動は、2つの時期にわけられる。

第1期 議会に対する請願と、大衆への啓蒙が行なわれた時期。1900年同盟会は議会に請願書提出。

1902年普通選挙法案が議会に提出。さらに1911年衆議院で可決されたが、貴族院で否決された。

第2期 全国的な大衆運動が繰り広げられた時期。1919年原敬内閣のとき、有権者の納税資格を直接国税10円から3円以上にひき上げた。この間、普選反対の立憲政友会が選挙で大勝し、運動は一時おとろえた。1925年、普通選挙法が成立、これにより満25歳以上の男子が衆議院議員の選挙権をもつことになる。

大正7年11月11日(1918)世界大戦の休戦の調印が行なわれた。代わりに悪性感冒が世界的に流行、これをスペイン風といった。

この頃、丸の内に三菱が1号館から6号までの洋館を建てたことで、三菱村と呼ばれ、やがてビル街の出現となるのだが、その大ビルのトップを切って、海上ビルが建てられたのは、大正7年のことである。

秋山 静代

このお二人は調べてみるまで、ほとんど知らなかった。ナショナルコード版の「書生節」では、静代の、高い声が、やや耳障りだ。楓谷の歌唱が、殺されてしまっている。

ディアポロなど、吹き込み曲をみると、静代は、クラシックの出身なのだろうか。私は、はじめ、民謡の出なのだろうか、などと思ってしまった。

丁と張らんせ やっこらやのや もし半出たら ネエアナタ わたしを売らんせ 吉原へ-----

(収集プロフィール)

秋山静代(あきやま しずよ、1 x x x ~ 1 9 x x) 静子 名義あり。大正から昭和前期にかけての歌手。

* 書生節のSP盤を聴く

- 1 デモクラシー節 秋山楓谷・秋山静代
- 2 一かけ節 斎藤松声・神長瞭月・作詞
- 3 スカラーソング 市川皖保・秋山静代
- 4 或る夜の艶歌師 寺井金春
- 5 東京節 後藤紫雲・斎藤松声
- 6 カチューシャ替歌 神長瞭月
- 7 ばらの唄 斎藤松声
- 8 ゼンジロゲーとチャイナマイ 秋山楓谷・秋山静代
- 9 ディアポロ 市川皖保・秋山静代
- 10 商船学校寮歌 渋谷白涙・鳥取春陽
- 11 城ヶ島の雨 渋谷白涙
- 12 被服廠の哀歌 石田一涙
- 13 籠の鳥 鳥取春陽
- 14 船頭小唄 鳥取春陽
- 15 復興節 斎藤一声
- 16 馬賊の唄 坂下信月
- 17 赤い唇 坂下信月
- 18 アバッシュの歌 石田一松
- 19 のんきな父さん 藤波松声
- 20 茅野従軍記者の歌 松本繁夫・伊藤静子
- 21 製糸小唄 植中文春
- 22 ああ漂流船 神長瞭月・富士見町山香

また、この頃、女性の自覚、因襲の打破を叫んで、こんな歌が流行った。

現代節

♪ 新案特許よくみれば 小さく出願中と書いてある アラ ほんとに 現代的だわネ

中略

♪ 独身主義とはそりゃ負け惜しみ 実のところは来人がない アラ ほんとに 現代的だわネ

♪ 新しい女といふてるうちに いつの間にやら古くなる アラ ほんとに 現代的だわネ

中略

♪ おともひきつれ生徒が通ふ 通ふ先生は腰弁当 アラ ほんとに 現代的だわネ

中略

♪ 貧にやつれて目をくぼませて うたふ君が代千代八千代 アラ ほんとに 現代的だわネ

(啞蟬坊詩曲)

こんな歌が大阪で流行った。

ホツトイテ節

♪ わたしが見こんでわたしがほれて キタサー わたしがサー 苦勞すりゃ 自由の権 ホツトイテ

♪ 切れてしまへば他人ぢやないか キタサー どこへサー 行こうと 自由の権 ホツトイテ

中略

♪ 米は台湾おかずはひじき キタサー これでサー 糸目が出るものか ホツトイテ

世相と演歌

一、演歌誕生

演歌とは、巷の唄、路傍から生まれ、世相に反映した流行歌である。

文字が大衆のものにならなかった時代は、声によってのみ、全てが伝えられていた。

文字による伝達としては、江戸期の瓦版があった。

明治になって、新聞が発行されても、それは直ぐ大衆のものとはならなかった。

漢語調でつづられる新聞は、ごく一部の限られた階級のもので、一般には矢張り、やれ節とか、一つとせ節といったものが、伝達の機関だった。

演歌の伝達者は、民権論者であり、明治**20**年頃の、いうところの壮士であった。

そこから「壮士節」と言われていた。

やがて、壮士から書生の時代となり、演歌を「壮士節」とよんでいた民衆が、こんどは「書生節」というようになった。

真の書生はこれをアルバイトで街頭で歌っていたが、演歌を専ら職業とする者が増え、巷ではこれを「演歌屋さん」と呼んでいた。

演歌屋がヴァイオリンを用いるようになったのは、明治**43**年頃で、

これがだんだん演歌屋の風俗となり、大正期から昭和の初期までつづいた。

「浅草行進曲」

この曲は、「道頓堀行進曲」（日比繁治郎：作詞、塩尻精八：作曲 歌唱 筑波久仁子5月発表 つづいて9月 二村定一・天野喜久代 昭和三年）の、替え歌、と言っていいのだろうか。作詞者の名義が、別人になっているが。この時期は一人のアーティストが、幾つもの名義を使うのが、横行していたので、詳細は不詳だが。

演歌師のなかでも、重要な位置を占める方。晩年の、品の良い写真の風貌をみる限り、このような壮絶な苦労を経た方とは、とても思えない。この時代は、弱い人間は、人知れずに消えていったのかも。

（多蛾谷素一(畑耕一)：作詞 塩尻精八：作曲 昭和五年吹き込み)

恋の灯輝く 真っ赤な色に 胸のエプロン そっと鳴る 空の浅草 涙雨----

(収集プロフィール)

石田 一松（いしだ いちまつ、1902～1956年1月）は、広島県安芸郡出身の演歌師、演歌歌手。作詞家、作曲家。お笑いタレント、吉本興業所属。戦前の一時期、石田一涙と名乗る。戦後は並行して政治家、衆議院議員を務め、タレント議員・第一号とされる。法政大学卒業。身長五尺四寸、体重十七貫。

*なぎら健吉は、彼の孫弟子にあたる。

*彼の鳴らす警鐘は、今新しく響き、現代社会の病巣の壁に鳴り渡る。石田一松をもっと評価したい。

生い立ち

広島県安芸郡府中村字山田(現在の府中町)生まれ。3歳で実母とは生き別れ、その後4人の継母に育てられた。うち3人の継母から虐められ、これを耐え抜いたという。父は井戸堀職人で、その後米相場で失敗。一松は苦学して広島市の私立明道中学に学ぶ。明道中学は当時、広島市中心部田中町に在り、修道中学、広陵中学と並ぶ広島市の私立三中と言われたが、硬骨蛮風の校風が遠因で1923年廃校になった。他の出身者には黒島亀人、西村伊作ら。同校角力部（相撲部）に所属、「明道のイシ」と呼ばれ22、3人の沖仲士（人夫）と大喧嘩し同校を退校。悪い評判が広がり広島に居られなくなり、「にいちゃん、どこにゆくんの、よそ行つちゃいけんよ、行つちゃいけん」と末妹に泣きつかれ、後を追って来るのを振り切って上京した。三等車の隅っこに乗り「俺をボンクラ扱ひにして、廣島の奴等、今に見て居れ、絶対に見返してやるけん」と心に誓った。この後、残った石田一家も府中に居られず、広島市内の橋本町（現在の中区）に転居。1945年の原爆投下で、爆心地から僅か1キロのこの家で、末妹を含めて兄弟姉妹の3人は皆死んだ。府中に居たままならば原爆には遭わなかっただろうといわれる。この死別が政治家を志すきっかけとなった。

演歌師

レンズ工員を経て法政大学予科入学。授業料を稼ぐため1920年、演歌の大先輩・添田唾蟬坊らの東京倶楽部に入り演歌師となる。テキヤの乾分（子分）となり、中学時代に少し習ったバイオリ

ン片手に毎夜東京中の縁日をまわり暗闇の中、書生節を歌い自ら編集した流行歌の歌本を10倍の値段で売って生計を立てた。全ての資金を稼ぐにはこの危険な商売しかなく、大学の予科3年・本学3年の卒業まで計約6年これを続けた。ヤクザに殴られ殴り、瞼の縁が常に紫色に腫れていた。代表作・インテリ時事小唄『のんき節』はこの時代1923年頃の作とされる。卒業後1930年、『酋長の娘』を作詞・作曲、1931年には藤波笑声名で『噫中村大尉』を歌いいずれも大ヒットした。当時は日本のレコード会社の創立が始まった時代、『酋長の娘』は1929年創立されたポリドール最初のヒットであった。

他のヒット曲に『時事小唄』、『のんきな父さん』、『いやぢゃありませんか』、『春の名残り』、『男の恨み』などがある。

1932年、吉本のトップスターであった柳家金語楼の推輓で吉本興業（東京吉本）専属となり、浅草万成座で初舞台。一時は弁護士を目指していたと言われ“インテリ・時事小唄・法学士”の看板を掲げて高座に上がり、洋服姿でバイオリン片手に『のんき節』で売り出し人気を博した。『のんき節』は添田唾蟬坊が作ったものだが、石田は自作を加え、替え歌にして庶民の側から社会を風刺した。「～凡て内密で取引きするのが闇取引きで御座います。帝国議会の闇取引きは秘密会議と申します～ハハのんきだね～」などと当時の軍部や政治権力、社会の矛盾を辛辣に批判。権力に抵抗する演歌師の姿勢をそのまま昭和の寄席に持ち込んだともいうべき芸で当局には睨まれ、しばしば出演停止を命じられたが庶民からは圧倒的人気を博した。

また舞台、テレビ、ラジオのほか、吉本が東宝と共同で製作した映画「東京五人男」（主演・横山エンタツ・花菱アチャコなど）にも出演するなど幅広く活躍。1938年には、吉本興業が朝日新聞と共同で結成した戦時演芸派遣慰問団「わらわし隊」にも参加、日中戦争時の中国大陸に派遣された兵士を慰問した。また若い頃から政治志向が強く町会議員選挙にも出ている（当落不明）

。 芸能人代議士

1946年4月10日、戦後初の衆議院議員総選挙に一人一党の日本正論党を掲げ大選挙区の東京1区から立候補。この選挙は女性議員が数多く出馬し初当選して話題を呼んだが、石田も今度は「～地盤とカバンは有りませんが、看板だけなら日本中～ハハのんきだね～」などと演説の間に持ち歌を歌って人気を集め、鳩山一郎、野坂参三、浅沼稻次郎らに次ぐ7位で見事当選した。当時は「タレント」という言葉が無かったので「芸能人代議士」と呼ばれた。この為今日言われるタレント議員・第一号とされその草分けとされる。

この後、中選挙区の東京5区から連続当選4回し代議士として活躍。三木武夫と行動を共にし国民協同党、改進黨に属した。議席を得ても芸能活動は辞めず昼は国会、夜はステージに立った。1951年、国民民主党に名前を変えていた党の党議に背き日米安保条約・対日平和条約の批准に反対、“全面講和”を主張して離党。1953年の「バカヤロー解散」による総選挙で落選。1955年の第27回衆議院議員総選挙では、党の公認をとれず無所属で出馬し惨敗。その後もヒロポン中毒に悩まされながら寄席に出演し続けた。1956年、長年にわたり打ち続けたヒロポンで身体はがたがたに蝕まれ胃癌により死去。享年53。

のんき哲学

1946年、衆議院議員となった年の12月に出版された自著「のんき哲学」は、タイトル通り自身の哲学、社会批判や自身の生き立ちなどが綴られており、近年一般的に出ている「タレント本」のメソッドと変わらない。戦前こうしたタレント本が出ていたのか不明だが、「のんき哲学」は「タレント本」としても先駆的な本かも知れない。

『のんき節』の替え歌には他に

「鮓に骨なしナマコに眼なし 政府に策なし議員に抱負なし 民に職なし 愛もなし 皮肉にや抱負と骨がある へ>のんきだね」

「物の闇なら物さへ作りや 闇はやむけどやみ難い 人の心に悲しい闇の 影がさしたら世は闇ぢや へ>のんきだね」

「正邪善悪非富不富は 人の心の奥にある 善をなしてるつもりでも つもりは心ぢやありません へ>のんきだね」

「醜い南瓜に唇よせて だまつて見てある青い空 南瓜はなんにもいはないけれど 南瓜の氣持はよく判る へ>のんきだね」

「権利々々と振りまはされては 権利も権利にやなりかねる 権利を振り廻しすぎますと 利権あさりと間違へる へ>のんきだね」

「鬼畜米英アメリカという字は米と書く 米は朝日にてらされて やがて日本のままになる へ>のんきだね」

著書・参考文献

のんき哲学（自著）大元社 1946

闘った「のんき節」タレント議員第一号・演歌師石田一松 水野喬著（文芸社）

日本流行歌史 古茂田信男、島田芳文、矢沢保、横沢千秋(共著)（社会思想社、1970年9月）

戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録 早坂隆著（中央公論新社、2008年）

反骨のバイオリン演歌師 石田一松

「金色夜叉」（宮島郁芳/後藤紫雲 詞・曲）

熱海の海岸 散歩する 貫一お宮の 二人連れ 共に歩むも 今日限り 共に語るも 今日限り
僕が学校 おわるまで 何故(なぜ)に宮さん 待たなんだ 夫に不足が 出来たのか さもなきや
お金が 欲しいのか

（収集プロフィール）

宮島郁芳（みやじま いくほう、明治27年(1894)～昭和47年(1972)）

農家の父久米吉の六男、本名敬二。小学校卒業後の明治43年、一家は田畑を手放し上京する。新聞配達、歯医者 of 書生、印刷工などの末、順天中学校(現順天高等学校)卒業後、苦学しながら早稲田大学文科予科に入学、文学を志した。苦学生として社会の底辺を知った郁芳は当時大正デモクラシーと共に隆盛した社会主義思想に共鳴し、その実践運動にも参加した。そのため特高警察に検挙され、“豚箱”といわれた留置場へぶち込まれリンチを受けること数回、ついに大学の授業料も払えず、早稲田お中退を余儀なくされた。

郁芳は生活のため自分で作詞作曲し、自分でバイオリンを弾きながら歌い歩く演歌師となった。大正7年24歳、浅草で芝居「金色夜叉」が好評なことから想を得て「金色夜叉」の歌を作詞作曲。公園などでバイオリンを弾きながら歌うと爆発的なブームを呼んだ。その後「流浪の旅」、「馬賊の歌」など発表。また、熱海市で毎年1月17日に行われる尾崎紅葉を偲ぶ紅葉祭に招待された。

晩年、昭和43年中村哲郎が発起人となり、柏崎市米山大橋わき青海川の鷗ガ鼻に「金色夜叉」の歌碑が建てられた。この除幕式には74歳の郁芳も列席、故里を愛した姿の最後となった。77歳没。（75歳没説もあり）

* 「金色夜叉」や「馬賊の唄」は当時の世相と相まって、全国的に爆発的な人気を博し、彼が歌いだすと、周囲は人で埋まったという。昭和45年に75歳で没した。

* 1980年代になって、硯友社文学全体の再評価の中で、典拠や構想についての研究が進み、アメリカの小説にヒントを得て構想されたものであるという説が有力になり、2000年7月、堀啓子北里大学講師が、ミネソタ大学の図書館に所蔵されているバーサ・M・クレイ (Bertha M. Clay) 『WEAKER THAN A WOMAN (女より弱きもの)』が種本であることを解明した。

* 現在の世相から、この曲の歌詞を読んでもみると、うーん、あまりにも。といたくなるけど、何しろすでに90年以上前の作品。社会は、まだまだ封建制に縛られ、古い仕来りに窮屈な日々。そんな中で、このお宮という女性の、自己の欲望に忠実な生き方は、褒めるべきなのか、非難すべきなのか。ともあれ、ひとりの男の運命を狂わせた、悪女であるのは確かであろう。

「金色夜叉」つづき

夫に不足は ないけれど

あなたを洋行(ようこう) さすが為

父母の教えに 従って

富山一家に 嫁(かしず)かん
如何に宮さん 貫一は
これでも一個の 男子なり
理想の妻を 金に替え
洋行するよな 僕じゃない
宮さん必ず 来年の
今月今夜 この月は
僕の涙で くもらして
見せるよ男子(おのこ) 意気地(いきじ)から
ダイヤモンドに 目がくれて
乗ってはならぬ 玉の輿(こし)
人は身持が 第一よ
お金はこの世の まわり物
恋に破れし 貫一は
すぎるお宮を つきはなし
無念の涙 はらはらと
残るなごさに 月さびし

*流浪の旅 (大正10年) 宮島郁芳作詞・後藤紫雲作曲

流れ流れて 落ち行く先は
北はシベリア 南はジャバよ
いずこの土地を 墓所と定め
いずこの土地の 土と終わらん
きのうは東 今日西と
流浪の旅は 何時までつづく
果てなき海の 沖の中なる
島にてもよし 永住の地欲し
思えばあわれ 一八の春に
親のみ胸を 離れ来てより
過ぎ来し方を 思いてわれは
遠き故郷の み空ぞ恋し

「復興節 歌唱：鳥取春陽・斎藤一聲」

添田知道の作品を、桜井敏雄、都家かつ江、なぎら健一、岡大介、根元延浩、などで聴いてみた。それぞれの思いと個性が、伝わってくる。もっとも、時代状況や背景が、そうイメージできる訳ではないので、理解度は、そう高くないが。

家は焼けても 江戸っ子の 意気は消えない 見ておくれ アラマ オヤマ 忽ち並んだ
バラックに 夜は寝ながら お月さま眺めて エーゾ エーゾ 帝都復興 エーゾ エーゾ----
(収集プロフィール)

添田知道（そえだ ともみち、1902年6月14日 - 1980年3月18日）は、日本の演歌師、作家、評論家である。芸名は-さつき、号は吐蒙（ともう）、啓蒙の逆で「世迷いごとを口にする」の意。

人物・来歴

1902年（明治35年）6月14日、添田唾蟬坊の長男として東京に生まれる。幼くして母を亡くし他家へ養子にやられるが、下谷区の万年小学校（学校はなくなったが、現在はその地に台東区立駒形中学校がある）で坂本龍之輔（駒形中学校飛地のグラウンド脇に胸像あり）の世話になり、1914年卒業する。

1916年（大正5年）、日本大学附属中学校（現在の日本大学第一高等学校）中退の後、売文社に勤め、父の演歌活動に参加、その跡を継いで「添田さつき」の芸名で演歌師となり、『パイノパイノパイ』などの流行歌を作り出す。浅草の会、素面の会などの世話役を務める。

1927年（昭和2年）より文筆活動を開始し、1940年（昭和15年）、街頭演歌の衰退に伴い文筆に専念、本名で、万年小学校時代の恩師・坂本を主人公とした長編小説『小説 教育者』（全四部）を書き、1942年（昭和17年）、新潮社文芸賞を受賞した。作品は、長谷川伸、吉川英治らから激賞される。受賞の時点では、『小説 教育者』は、第三部までしか書かれていなかった。

戦後は、演歌師の生活などを描いた著作を刊行し、1964年（昭和39年）、『演歌の明治大正史』で毎日出版文化賞受賞。1967年（昭和42年）、『歌と音でつづる明治』の監修で、第9回日本レコード大賞企画賞を受賞。

1980年（昭和55年）3月18日、信州・上田市の安藤病院で食道がんで死去。77歳没。「添田知道を偲ぶ会」が、同年5月2日、浅草の伝法院で行われ、竹中労、田谷力三、小沢昭一らが参集した。

浅草・浅草寺の境内鐘楼下には、父・唾蟬坊の碑と知道の筆塚がある。遺稿などは、神奈川近代文学館に寄贈された。

近年、チンドン楽団のソウル・フラワー・モノノケ・サミットが、父・唾蟬坊の楽曲とともに知道の楽曲もレパートリーにしており、CD作品としてもリリースしている（『アジール・チンドン』に「復興節」「東京節」が、『デラシネ・チンドン』に「ストン節」が収録）。

* 1997年東芝EMIから発売「甦るオッペケペー」より。三代目桂藤兵衛/作 川上音二郎/演出
『オッペケペー節』

1900年（明治33年）パリ万博での川上音二郎一座の公演をイギリスのグラモフォン社が録

音したもの。川上音二郎の声ではない。

著書

『利根川随歩』、三学書房、1941年

『人生の奇術』、興亜文化協会、1942年

『小説 教育者』（全4部）、錦城出版社、1942 - 47年（玉川大学出版部より復刊、1987年）

『どん底の顔』、興栄社、1948年

『流行り唄五十年 啞蝉坊は歌う』、朝日新聞社（朝日文化手帖）、1955年

『演歌の明治大正史』、岩波新書、1963年

『香具師（てきや）の生活』、雄山閣出版、1964年

『日本春歌考 庶民のうたえる性の悦び』、光文社カップパックス、1966年

『演歌師の生活』、雄山閣出版、1967年

『東京の味』、保育社カラーパックス、1968年

『ノンキ節ものがたり』、青友書房、1973年

『秘籍江戸文学選 9 春歌拾遺考』、日輪閣、1975年

『奥上州の旅 利根の川上随歩』、崙書房、1977

この方は、テレビで何度か（4、5回）見たことがある。私が45歳ごろまでは、活動されていたようなので、当然ではあるが。勿論、その頃でも、演歌師などという言葉は私語に近く、実体を知らない私は、そのアンティークな雰囲気には惹かれるとともに、何か怪しげな感じを受けたのも事実である。

この桜井氏は、私のイメージする演歌師に、もっとも近い方である。歌唱は、謡い、よりも歌謡にずっと近づいている。鳥取春陽、神長瞭月、などに比べて、土俗性もぐっと薄らぎ、知的にコントロールされた趣きがある。

「アパッシュの唱」

華のパリーの どん底の 闇に咲いたる地の華は 罪と罰との泥水の なかに生まれた悪の華---

（収集プロフィール）

桜井敏雄（さくらい としお、1909～1996）石田一松の弟子で、同じく弟子であった田浦美津路の弟弟子にあたる。桜井敏雄は本当の演歌師、いわゆる寅さんと同じテキヤに属する職業としての最後の演歌師であった。彼は本当に、お祭りや大道で書生節をバイオリンで演奏しながら歌っていた。それ以降の演歌師はアマチュアか芸人出身の演歌師たちである。

*明治後期に自由民権運動が台頭して、街頭で演説をする人が多くなったために、政府は風紀を乱すとして街頭での演説を禁止にしましたね。歌は禁止にしなかったのだから、楽器を持って歌う事で演説をやったのが、演歌と云う言葉の始まり。だから、職業演説師がないように、流しと違って、職業演歌師ってのはいなかったんだと思います。でも、演説と違って演歌は演芸ともなるので、寄席に色物として出演するような事もあったかも知れません。

*帝大生ゆめじの大道芸日記 より

すぐ近くで直接みたことがあるが、すごく姿勢のいい老人であった。演歌を歌うというより、昔（戦前）のことを話すほうが多かったが実際に経験しているためか説得力があった。歌は、古いのんき節や「ああわからない」、金色夜叉などを歌った記憶がある。

公園のテント（控え室）の中で待機していたときも、すすめられてもお弁当には手をつけず、「終わってから食べます」といった言葉が記憶に残っている。

芸や仕事に対する真摯な態度を感じて昔の方はすごいなと思った。

*田浦美津路もレコードを残しているが桜井もレコード、CDを多数残している。

*野毛には成田山の別院があり、その境内を中心に市が立ち、演歌師や放浪芸人が来た。つまり大正時代から昭和初期にかけて野毛では大道芸が出ていたという。

1996年に亡くなった最後の演歌師と呼ばれた桜井敏雄さんは、大正演歌師の石田一松の愛弟子だったが、この野毛の境内で、ヴァイオリン演歌をやっていたと生前よく語っていた。

*谷 人生「路傍の流行唄（みちばたのはやりうた）」より

<歌の種類と売行き>

歌の種類は中々沢山あるが、大別すると比較的寿命の永いものと流行歌の名にそむかぬごく短

生命のものがある。

比較的寿命の長いものは、有名な小説などを歌に焼き直したもの、即ち、不如帰の歌、己が罪の歌、金色夜叉の歌、想夫憐の歌、肉弾の歌・・・などで、なかんずく不如帰の歌は、小説の不如帰が不朽の生命あるがごとく、ずいぶん古くから今だに生命を保っている。『・・・ああ浪さんよなぜ死んだ、僕は夫の武男ぢやぞ』口語調の悲哀の胸迫る歌をよく耳にする。それから一世を騒がした事件を歌ったもの、即ち、野口男三郎の獄屋の告白、藤村操を歌った華巖の嵐などがそれである。

パッと流行ってパッと消えるものには、二、三年前天下を風びした、マガイイ節、それから紫節、近頃流行ってもう下火になったドンドン節などがそれである。古いことを調べたらトコトットという喇叭節の流行ったこともある。

さてこの売行きだが、比較的寿命の長いものはどうしても一時にパッと売れない、流行歌は売れる期間が短いだけに、流行の最中となれば面白いほど売れる、それはそのはずであろう。マガイイ節が流行った頃、一人してある祭礼の日に十円以上売ったという話を聞いた。普通でも縁日などで三、四円の金を揚げるには大した骨ではないといっている。

「復活ヴァイオリン演歌・小沢昭一」CBSソニー

A面

- 01 春の名残り
- 02 無情の夢
- 03 円満ソング
- 04 開かなかったパラシュート
- 05 復興節
- 06 ゴンドラの唱
- 07 流浪の旅
- 08 生活戦線異状あり
- 09 橋をつくったのはこの俺だ
- 10 アパッシュの唱

B面

- 01 金色夜叉
- 02 スカラーソング
- 03 さすらいの唄
- 04 いやじゃありませんか
- 05 籠の鳥
- 06 月は無情
- 07・8 のんき節
- 09・10 のんき節
- 11 のんき節
- 12～15 のんき節

1 6 東京節

1 7 カチューシャの唄

まったく知らない方である。調べてみると、いちおうの業績を残しているようだ。歌声は、桜井敏雄に近い。桜井よりも、言葉が明晰ではないが、低音が主体の、語りのような唄いかたである。ゆっくりとした歌唱には、独特の味わいがあるようだ。

俺もゆくから君もゆけ 狭い日本にゃ住み飽きた 波の彼方は大荒野 そこにゃ地獄の 谷がまつ----

(収集プロフィール)

金子潔 (1913-1986)

長崎平戸に生まれる。大正15年、上京し、倉持愚禅主宰の東京青年倶楽部に所属。添田唾蟬坊の指導も受ける。「ノンキ節」「東京節(パイノパイノパイ)」「水郷の唄」などの演歌を歌った。

*下記の曲は、映画「渡り鳥故郷へ帰る」の主題歌のようだが、リメイクとして、素晴らしい出来栄である。小林旭の、唄の魅力も、フルに発揮されている。

俺もゆくから君もゆけ (1962 改作・替歌：西沢 爽 補作曲・編曲：粕林正一 歌唱 小林旭) (元唄 詞：宮島郁芳 曲：鳥取春陽 馬賊の唄)

赤い夕日が なにつらかろう 男なりゃこそ 旅をゆく 俺には 父も母もなく 生れ故郷にゃ 家もなし 星よまた>け 涙の星よ 男 さびしや 渡り鳥----

*帝大生ゆめじの大道芸日記 より

演歌師はどんな勢力にも加担することなく、時世に対する風刺や皮肉を歌ってきた。石田一松などはどこにも属さず、テキヤとして弟子たちと一家をなしてきた。もちろん戦後国会議員になったことなどからも歌だけでなく、才覚もあつたのであろう。

金子潔はいつから演歌師から「転向」して共産党のプロパガンダ(宣伝)部員になってしまったのか。ひとつの政党、共産党系の出版社から一代記を出すこと自体、すでに共産党の広告塔であり、演歌師ではなくなっていると考えられる。

愛製[CD] 明治・大正・昭和の哀歌集～蟹工船・あきらめ節～

明治・大正・昭和の哀歌集～蟹工船・あきらめ節～

アーティスト: オムニバス, 桜井敏雄, 金子潔, 秋山ふう谷, 神長瞭月等

メーカー: コロムビア

*金子潔の一代記「演歌流生記」を共産党系の新日本出版社から出版している。

*日本の流行歌は明治元年、朝廷の命により江戸へ向かう薩長連合軍の士気を鼓舞するための進軍歌「宮さん宮さん」に始まる。明治時代の流行歌は「宮さん宮さん」「抜刀隊の唄」などの軍歌に代表される洋楽調、「お江戸日本橋」「ぎっちゃんちゃん」などの日本調、そして、自由民権運動に携わる「壮士」と呼ばれる人々による演歌の三つに分類される。壮士による演歌は「壮士節」と呼ばれ、街頭でさかんに歌われた。明治の中頃になると、学問を志して上京する苦学生が増える。彼らは学費を稼ぐために演歌を歌い、それらは「書生節」と呼ばれ、演歌の主流となつていった。大正時代に入ると演歌師は、「浅草オペラ」で歌われるアリアの替え歌などで世相

の風刺を行っていた。街頭で流行歌を歌う演歌師は大正時代まで数多く存在したが、昭和の時代に入り、レコードの普及とともに姿を消していった。また、島村抱月の芸術座公演は劇中で松井須磨子によって歌われた「カチューシャの唄」「ゴンドラの唄」のヒットもあり、大好評となる。これらを作曲した中山晋平は大正期最大のヒット・メーカーとして数多くの童謡、民謡、流行歌をヒットさせた。

この曲は、小さな頃から、よく知っている。ということは、ラジオや商店街から、よく流れて来ていたのだろう。俗っぽく、やや下卑ていて、そのうエコミカルでエキセントリックな感じ、を受けていた。また現在では、禁止用語に近いフレーズも多いので、推奨は出来ない。中村についてリサーチはしてみたが、どの資料源も、この方については、資料がほとんどない状態と言っている。試聴してみると、明らかに当時のクラシックの発声で、唄っている。俗っぽい〇〇小唄のような唄の内容と、違和感があるイメージだけれど。意外にも、そう乖離していない。むしろ、異種融合というのか、不思議な味わいがじわじわと。

当時は、音大生等で、生活費稼ぎなどのため、または頼まれたり、自分の何かの記念として、数曲レコードを吹き込み、芸能活動はほとんどせぬまま、そのまま普通人としての道（教師、会社員、家業を継ぐ、など）に戻る人が、ときどきいたという。（当時のプロ歌手たちの証言や、メディアに残された記録による。）中村も、そういうひとりだったのだろうか。

『酋長の娘』（石田石松 詞・曲 歌唱 中村慶子 大正14年）

わたしのラバさん 酋長の娘 色は黒いが 南洋じゃ美人 赤道直下 マーシャル群島 ヤシの木陰で テクテク踊る----

(収集プロフィール)

中村慶子（なかむら けいこ、1×××～19××）クラシック出身の歌手。大正の終わりごろから活動。ただし、現在どの資料源も、資料がほとんどない状態で、詳細は不明。

*大正十年、大戦に勝利した日本は、ドイツから南洋諸島を譲り受けた。その後南、洋ブームが起きて、このような歌が流行ったとのこと。

*当時の、この曲の、ほかの歌唱者について。大阪南地 富田屋喜久治、数年後に、新橋喜代三が吹き込み。この新橋版が粋でいい、という声が多いようだ。

*派生

ドリフのラバさん（替え歌） ドリフターズ

*ほかに、昭和五年、ポリドールから「梢の歌」サトウハチロー：作詞、堀内敬三：作曲、歌唱：中村慶子。松竹キネマ「若者よなぜ泣くか」主題歌。梢は若き田中絹代が演じた。ここでの中村の歌唱は、あまり良くない。言葉がいちぶ明晰でなく、必要のない所で、なぜか語尾を張り上げてしまうので、耳に痛い感じだ。

私が子供だったころ、ラジオから、この方（ほかの浪曲師の方も）の浪曲は、よく流れてきた。なかでも、演目はやはり清水次郎長伝が多かったようだ。この当時は、浪曲もまだ人気があり、買い物に商店街に出かけると、演歌・歌謡曲の間に、ときどき浪曲が流れた。勿論、若いファンは少なく、熱心なファンは主に50歳以上の人達だったが。私は、こういう特殊な声は、どのような訓練をして作るのだろうか？と、いつも不思議に思っていた。演歌に先行し、演歌とともに長い間、大衆文化の華であった、浪花節。昭和初・中期の有名な流行歌手のなかには、浪曲を母体に、世に出た方も多い。つまり、現在の演歌・歌謡曲系(広くいえば、Jポップも含む)の、源流のひとつなのだ。

（収集プロフィール）

広沢 虎造（ひろさわ とらぞう、1899年（明治32年）5月18日 - 1964年（昭和39年）12月29日）は、昭和時代の浪曲師。東京府東京市芝区（現・港区芝）出身。本名・山田信一。

*旅行けば駿河の国に茶の香り、や“寿司を食いねえ”“バカは死ななきやなおらない”など名文句、名調子で一世を風靡した広沢の没後40年、いま甦る魅力。

来歴

少年時代から浪花節を好み、腕自慢の素人として天狗連で「東川春燕」の名で人気を取っていた。19歳の時に上方の浪曲師二代目広沢虎吉に弟子入りし、広沢天勝、後に天華と名乗った、23歳で二代目広沢虎造を襲名、帰京。師匠譲りの浪花節に、中京節の鼈甲斎虎丸や関東節の木村重松らの節回しを独自に取り入れた『虎造節』で、戦前から戦後にかけて一世を風靡した。

持ちネタは、国定忠治、雷電爲右エ門、祐天吉松など多岐に渡るが、中でも人気を博したのが、講談師三代目神田伯山直伝（？）といわれる清水次郎長伝であった。とりわけ森の石松を題材にした「石松三十石船」は人気が高く、「寿司を食いねえ」「馬鹿は死ななきやなおらない」などのフレーズは、ラジオ放送の普及も相まって、国民的な流行語となった。

また戦前は映画にも積極的に出演し、劇中でしばしば浪花節を演じていた。映画出演に関して吉本興業のマネジメントを受けるだけでなく、浅草花月など当時吉本が東京に持っていた多くの劇場にも出演、吉本が中国大陸に派遣した軍隊慰問団・わらわし隊にも参加するなど、半ば吉本の専属状態となっていた。

1959年（昭和34年）に脳溢血で倒れ、言語障害を発症。リハビリに取り組みも回復せず、1963年（昭和38年）の引退興行をもって浪曲界から身を引き、翌1964年（昭和39年）死去した。65歳没。

虎造の死後、浪曲界にはスターが生まれず、また浪曲そのものが高度経済成長期以降の主流となったテレビ放送では全く映えなかったため、以降浪曲界は、現在まで続く長い冬の時代が。虎造本人に関しては近年、次郎長伝をリアルタイムで聞いていた世代を中心に再評価の気運が。

*神田伯山の歯切れのいい啖呵に惚れ込んだ虎造は、〈次郎長伝〉を浪花節で口演しようと考えている。虎造は後年、伯山からじかに教わったと述べているが、浪曲の研究家である芝清之（しばきよし）氏の調査によると、そのような事実は無かったようだ。新興の芸能だった浪花節は、講

談からネタを取り入れると同時に、人気も奪ってしまっていた。〈次郎長伝〉は伯山の苦心作である。浪花節の若手に譲るなどあり得なかった。

*妻は曲師の広沢美家好。次男の山田二郎は、NHK佐賀、ラジオ東京・TBSの元アナウンサーである。

代表的な演目

清水次郎長伝

秋葉の火祭り

名古屋の御難

勝五郎の義心

お蝶の焼香場

次郎長の貫禄

久六の悪事

次郎長の計略

大野の宿場

代官斬り

石松金比羅代参

石松三十石船

石松と身受山鎌太郎

石松と都鳥三兄弟

石松と小松村七五郎

閣魔堂の騙し討ち

お民の度胸

石松の最後

為五郎の悪事（本座村為五郎）

追分三五郎

追分宿の仇討ち

清水の三下奴（善助の首取り）

鬼吉喧嘩状

次郎長と玉屋の玉吉

血煙荒神山（蛤屋の喧嘩）

血煙荒神山（神戸の長吉）

吉良の仁吉

仁吉男の唄

吉良の仁吉（最後の荒神山）

最後の荒神山

石松若き日

七五郎懺悔・追分宿の仇討ち（追分三五郎より）

清水港義侠伝

明月清水港

国定忠治伝

名月赤城山

忠治ふたり

赤城の血煙

火の車お萬

山形屋乗り込み

唐丸籠破り

祐天吉松

夕立勘五郎

寛政力士伝 雷電爲右エ門

寛永三馬術

映画

エノケンの森の石松（1939 東宝東京、監督：中川信夫）浪曲口演

エノケン・虎造の春風千里（1941 東宝、監督：石田民三）篠三郎太役

書籍

「江戸っ子だってねえ 浪曲師廣澤虎造一代」 新潮文庫 （吉川潮）

「ご存知! 清水次郎長伝」 KKベストセラーズ （二代目 広沢虎造）

この唄は、昭和以前の曲としては、「ゴンドラの唄」や「琵琶湖周航の歌」などととも、現在でもよく歌われている。不変的な何か、歌のなかにあるからであろう。何かは、人によって違うと思うが。一読して、日本人の琴線をかきたてるような、フレーズのオンパレードである。いうまでもなく、鉄幹の文語の配列や文学的構成力も凄い。5、6人の歌唱を聴いてみた。ボニージャックスとフォレストが、この曲の壮大な意図と、願う意志を、素直に典雅に表現していて良かった。

(作詞 与謝野 寛 作曲 不明 明治38年:1905)

- 1 妻をめとらば 才たけて
みめ美わしく 情けある
友を選ばば 書を読みて
六分(りくぶ)の俠気 四分(しぶ)の熱
- 2 恋の命を たずぬれば
名を惜しむかな 男(おのこ)ゆえ
友の情けを たずぬれば
義のあるところ 火をも踏む
- 3 汲めや美酒(うまざけ) うたひめに
乙女の知らぬ 意気地(いきじ)あり
簿記の筆とる 若者に
まことの男 君を見る
- 4 ああ われダンテの 奇才なく
バイロン ハイネの熱なきも
石を抱(いだ)きて 野にうたう
芭蕉のさびを よろこばず
- 5 人やわらわん 業平(なりひら)が
小野の山ざと 雪をわけ
夢かと泣きて 齒がみせし
むかしを慕う むら心
- 6 見よ西北に バルカンの
それにも似たる 国のさま
あやうからずや 雲裂けて
天火(てんか)一度(ひとたび)降らんとき
- 7 妻子を忘れ 家を捨て
義のため恥を 忍ぶとや
遠くのがれて 腕を摩(ま)す
ガリバルディや 今いかに

- 8 玉をかざれる 大官（たいかん）は
みな北道（ほくどう）の 訛音（なまり）あり
慷慨（こうがい）よく飲む 三南（さんなん）の
健児は散じて 影もなし
- 9 四度（しど）玄海の 波を越え
韓（から）の都に 来てみれば
秋の日かなし 王城や
昔に変わる 雲の色
- 10 ああわれ如何（いか）に ふところの
劍（つるぎ）は鳴りを ひそむとも
咽（むせ）ぶ涙を 手に受けて
かなしき歌の 無からめや
- 11 わが歌声の 高ければ
酒に狂うと 人のいう
われに過ぎたる のぞみをば
君ならではた 誰か知る
- 12 あやまらずやは 真ごころを
君が詩いたく あらわなる
無念なるかな 燃ゆる血の
価（あたい）少なき 末の世や
- 13 おのずからなる 天地（あめつち）を
恋うる情けは 洩らすとも
人をののしり 世をいかる
はげしき歌を ひめよかし
- 14 口をひらけば 嫉（ねた）みあり
筆を握れば 譏（そし）りあり
友を諫（いさ）めて 泣かせても
猶（なお）ゆくべきや 絞首台
- 15 おなじ憂いの 世に住めば
千里のそらも 一つ家（いえ）
己（おの）が袂（たもと）と いうなかれ
やがて二人の 涙ぞや
- 16 はるばる寄せし ますらおの
うれしき文（ふみ）を 袖にして
きょう北漢（ほくかん）の 山のうえ
駒立て見る日の 出（い）づる方（かた）

* 4 番のラストの「ず」は、意思・推量の助動詞とのこと。喜ぼう、という意味だそうです。

私は、長い間、否定の意味と。

*明治28年、招かれて漢城（現在ソウル）の日本語学校に教師として赴任。この歌は在韓中の明治31年（1898）に作られたといわれています。

（収集プロフィール）

与謝野 鉄幹（よさの てっかん、1873年（明治6年）2月26日～1935年（昭和10年）3月26日）は、日本の歌人。本名は寛。鉄幹は号。与謝野晶子の夫。後に慶應義塾大学教授。文化学院学監。

来歴

京都府岡崎（現・京都市左京区）に与謝野礼蔵の四い男として生まれる。父・礼蔵は西本願寺支院、願成寺の僧侶であった。礼蔵は庄屋の細見家の次男として生まれたが、京都府与謝郡出身ということから、明治の初めより「与謝野」と名乗るようになったという。母は初枝、京都の商家の出である。

1883年（明治16年）大阪府住吉郡の安養寺の安藤秀乗の養子となり、1891年まで安藤姓を名乗った。1889年（明治22年）西本願寺で得度の式をあげた後、山口県徳山町の兄照幢の寺に赴き、その経営になる徳山女学校の教員となり、同寺の布教機関紙『山口県積善会雑誌』を編集。そして翌1890年（明治23年）鉄幹の号をはじめて用いた。さらに1891年養家を離れ与謝野姓に復した。

山口県徳山市（現:周南市）の徳山女学校で国語の教師を4年間勤めるも、女子生徒（浅田信子）との間に問題を起こし、退職した。このとき女の子が生まれたが、その子は間もなく死亡している。次いで別の女子生徒、林滝野と同棲して一子、萃（あつむ）を儲けた。

1892年（明治25年）徳山女学校を辞して京都へ帰る。11月ごろ20歳で上京して、落合直文の門に入る。1894年（明治27年）短歌論『亡国の音』を発表。1896年（明治29年）出版社明治書院の編集長となる。かたわら跡見女学校に教えた。同年7月歌集『東西南北』、翌1897年（明治30年）歌集『天地玄黄』を世に出す。その質実剛健な作風は「ますらおぶり」と呼ばれた。1899年（明治32年）東京新詩社を創立。同年秋、最初の夫人浅田信子と離別し二度目の夫人林滝野と同棲、麴町区に住む。

1900年（明治33年）「明星」を創刊した。北原白秋、吉井勇、石川啄木などを見出し、日本近代浪漫派の中心的な役割を果たした。しかし、当時無名の若手歌人であった鳳晶子（のち鉄幹夫人）との不倫が問題視され、文壇照魔鏡なる怪文書で様々な誹謗中傷が仕立て上げられた。だが、晶子の類まれな才能を見ぬいた鉄幹は、晶子の歌集『みだれ髪』作成をプロデュースし、妻滝野と離別、1901年（明治34年）晶子と再婚し六男六女の子宝に恵まれた。鉄幹と離婚した滝野はのちに正富汪洋（まさとも おうよう）と再婚した。

1901年8月、『みだれ髪』刊行。『みだれ髪』の名声は高く、『明星』における指標となり『明星』隆盛のきっかけとなった。1908年（明治41年）『明星』は第100号をもって廃刊。なお、1921年に第二次『明星』が創刊し、そして1927年に廃刊する。

結婚後の鉄幹は極度の不振に陥る。1911年（明治44年）、晶子の計らいでパリへ行く。のち晶子も渡仏、フランス国内からロンドン、ウィーン、ベルリンを歴訪する。だが、創作活動が盛んとなったのは晶子の方で、鉄幹は依然不振を極めていた。再起を賭けた労作、訳詞集『リラの花

』も失敗するなど、栄光に包まれる妻の影で苦悩に喘いだ。1915年（大正4年）の第12回総選挙に故郷の京都府郡部選挙区から無所属で出馬したが、落選した。また、1922年（大正11年）の森鷗外の死は鉄幹にとって有力な庇護者を失うに等しい打撃であった。1921年に建築家、西村伊作、画家、石井柏亭そして妻、晶子らとともにお茶の水駿河台に文化学院を創設する1931年（昭和5年）、雑誌「冬柏」を創刊。1933年（昭和7年）、上海事変に取材した「爆弾三勇士の歌」の毎日新聞による歌詞公募に応じ、一等入選を果たした。1935年（昭和10年）、気管支カタルがもとで死去。晶子は「筆硯煙草を子等は棺に入る名のりがたかり我れを愛できと」という悲痛な追悼の歌を捧げた。

小唄勝太郎で同じ曲を聴いてみると、笑い声はなく、崩した歌い方ではなく、美しい？歌い方である。もちろん、𠄎治のような、磊落さ楽しさはないが。どちらが正しい、ではなく、その人のキャラや時代の流行り、などがあるのだろう。

(収集プロフィール)

吉原 𠄎治 (よしわら しめじ、18XX~19XX)

*oitabonodori1 より

有明とは有明行灯の略で、夜通し灯し続ける行灯のことだそうです。この唄は存じておりましたが、𠄎治さんの笑い声入りは初めて聴きました。

♪有明の、油のもと菜種なり、蝶に焦がれて逢いに来る、アーぜひともぜひとも、元を質せば深い仲、死ぬる覚悟で来たわいな、アーぜひともぜひとも ♪今朝も羽織の綻びを、わしに縫えとは気が知れぬ、アーぜひともぜひとも、嫌な私に縫わすより、好いたあの娘に頼まんせ、アーもっとももっともウフフフフフ ♪一度は気休め二度は嘘、三度のよもやにひかされて、アーぜひともぜひとも、浮気男の癖として、女房にするとはいちよりの洒落かいな、アーまったくまったくウフフフフ 3番は、「二上り新内」でお馴染みの文句ですね。他に、♪乱れ髪して膝枕、やつれ姿を見るにつけ、可愛やわし故この苦勞、男涙がほろほろと ♪雪はちらちら小夜嵐、表の格子をとんとんと、慈悲じゃ情じゃここ開けて、今宵逢わなきや凍え死に ♪あの時別れて今日までも、音信便りの無いにつけ、私が芸者の身でなくば、草の根分けても逢いに行く 等、いろいろな文句があります。

*nack500 より

菜の花に戯れる蝶、もとより深い仲の菜種油に灯をともし有明行灯、灯に入れば蝶は身を焦がし、死ぬる覚悟。激しい戀の路でしょうか。細部に演者毎、流行った時期毎に小異があるようです。はい、最近𠄎治師匠のウフフフがないと寂しいですし、ありますと相好を崩して思わず笑ってしまいます。𠄎治師匠の面目躍如ですね。

この盤のレーベルはかなり古いものです。下の方に篆書で「最新式写声機平円盤」と書いてあります。「蓄音機」という言葉ができる前のものとおもいます。そのころは「写声機」と言っていたのですね。

*古音盤発掘会 より

𠄎治師のレコードは、すべて旧吹込だと思っていたのだが、昭和に入ってからレコードを見つけてしまった。

恐らく70歳近い頃の録音である。

初期の電気録音であるからしてあまり良い音では入っていないが、持ち前の美声(宝集家金之助もそうだが、年を取っても美声を保っている人間が希にいる)と、時折張り上げた大きな声によって音が破れている箇所がある事、それからお約束の笑い声【この盤では"ウフフフフ"ではなく"ンハハハハハ"と笑っている】が入っている事から、あの𠄎治で間違いのないと思われる。(※太陽レコードに吹込んでいる𠄎治は別人)

10年以上のブランクがあってからの吹込み、しかもトンボ印ニッポンレコード、実に興味深い。

吉原メ治(旧・メ壽)は、明治・大正時代のレコード文化黎明期に於いて、吉原で鍛えられた美声・声量共に格別に依って、吹き込みには重宝された。

*ふるあのブログ より

明治の出張録音盤時代から大正の中ごろまで、小唄・端唄の世界で絶大な人気を誇ったのが、東京・吉原の芸妓、吉原メ治だった。

明治38年頃のアメリカ・コロムビア時代は「メ壽」、レコードが国産化になった同42年の日米蓄音器商会時代以降は「メ治」とレーベルに表記されている。写真は日本蓄音器商会（日米蓄音器商会の後進）の「東京メ治レコード」の『ドンドン節』。メ治の顔写真が入っている。吹き込み曲はざっと100曲。「猫じゃ猫じゃ」「かっぽれ」「ドンドン節」「推量節」「米山甚句」「茄子と南瓜」「磯節」「芝で生れて神田で育ち」等々・・・明治時代に流行した小唄・端唄のレコードが多い。アメリカ・コロムビア時代には、『大津絵』『詩入サノサ』などの俗曲のほか、『忠勇武談』のような福島安正中佐の単騎シベリア横断をテーマとした時事物もある。

艶っぽい声ではなく、愛嬌で聴かせる唄い手だ。

*無音の音声 より

御詠歌は西国三十三ヶ所巡りのさいにお遍路さんたちがそれを唱えて巡ったものであるそのルーツは聲明にあり更にはそうちんおうの梵唄更に更にさーまうゝえーだとしゃぶだびどやへと辿る事が出来る あじあの聲技法の根の一つから生まれている 聲技である。新藤謙氏は歌謡曲をうめき型と嘆き型に分けうめき型には新内や浪花節 嘆き型には御詠歌や子守り歌の遺伝子が継承されていると分析している。

私の祖母もよく御詠歌を歌っていた その節は今でも耳の奥に残っている。山村豊子の御詠歌は素朴なもので素晴らしいいわゆる俗曲のプロがやるものは格式ばりタマ抜けなものが多いがこれは山村豊子のは生きた御詠歌に近い。御詠歌の遺伝子は今でも残っているとは思いますが少なくなっている事は事実・・・。

*ニッポニカより・俗曲

日本音楽の分類用語。1870年代（明治初期）の新造語で、時代によって定義は変わる。（1）明治時代 宮廷や寺社で行われた雅楽に対し、庶民の音楽を総括する用語であった。すなわち、義太夫(ぎだゆう)、端唄(はうた)、常磐津(ときわづ)などの三味線音楽や箏曲(そうきょく)、あるいは各種の大道芸やはやり歌などの総称。しかし家元制度の確立や音楽観の変化により、俗曲の範囲はしだいに狭まっていく。人気のあった歌い手は、菖蒲(あやめ)和佐之助、立花家橘之助(きつものすけ)、徳永里朝(とくながりちょう)、西国坊明学(さいこくぼうめいがく)など寄席(よせ)の出演者である。（2）大正から昭和前期 はやり歌を中心とする巷間(こうかん)の音楽。寄席の音曲(おんぎょく)や花柳界から派生した歌、さらに俚謡(りよう)(いまの民謡)などのレコード歌謡を含む。名をあげた歌い手は、天中軒雲月(うんげつ)、豊年斎梅坊主(うめぼうず)、吉原メ治(しめじ)、山村豊子、志賀廼家淡海(しがのやたんかい)、柳家雪江ら。（3）昭和中期 ラジオの黄金時代であった1949年（昭和24）から5年間、ラジオ番組「俗曲の時間」は、端唄、うた沢、小唄、寄席の音

曲などを取り上げたので、これら三味線小歌曲が俗曲だと誤解された。柳家三亀松(みきまつ)や西川たつが人気を集めたし、浅井丸留子(まるこ)は独特の曲を残した。(4) 現代 定義があいまいであるばかりか、「俗曲」ということばすら一般的でなくなったが、次の6種を含んだ概念とみてよい。括弧内に代表的な曲を示すと、大道芸(深川、奴(やっこ)さん、かっぼれ)、門付(かどづけ)芸(法界節)、端唄以外のはやり歌(江戸から明治にかけて流行した大津絵、都々逸(どどいつ)、さのさ、東雲節(しののめぶし))、寄席の音曲(木更津甚句(きさらづじんく)、縁かいな、たぬき)、花柳界の歌(せつほんかいな、浅い川)、そのほか(角力(すもう)甚句、益田太郎冠者(ますだたろうかじゃ)の作品)。なお、「俗曲」の同意語に「俗謡」がある。これは民謡などの座敷唄化したものとみなして差し支えない。[倉田喜弘]

子供の頃から、ときどき聴いていた唄である。ラジオやテレビから、流れてくる唄として、であるが。言葉はすでに古く、おまけに現代の文脈からは、歌詞の内容が判りにくい部分がある。5、6名の歌唱を聴いてみた。本来、学生歌であるので、東大生の応援団の歌唱は、騒々しく拙いが、青春に在る者に特有の味わいがある。大人の心を満たすのは、やはり森繁久弥の、悠揚とした独特の歌唱が合うようだ。

(作詩 矢野勘治・作曲 楠 正一 明治35年)

- 1 嗚呼(ああ)玉杯に 花うけて
緑酒(りょくしゅ)に 月の影宿(やど)し
治安の夢に 耽(ふけ)りたる
栄華(えいが)の巷(ちまた) 低く見て
向ヶ岡(むこうがおか)に そそり立つ
五寮の健児(けんじ) 意気高し
- 4 花咲き花は うつろいて
露おき露の ひるがごと
星霜移り 人は去り
舵とる舟師(かこ)は 変るとも
我(わが)のる船は 常(とこし)えに
理想の自治に 進むなり
- 5 行途(ゆくて)を 拒むものあらば
斬りて捨つるに 何かある
破邪の剣を 抜き持ちて
舳(へさき)に立ちて 我呼べば
魑魅魍魎(ちみもうりょう)も 影ひそめ
金波銀波の 海静か

(収集プロフィール)

楠 正一 (くすのき しょういち、1880～1945) 秋田県出身の、作曲家。

来歴

楠家は、楠正成の子孫である伊勢楠氏の出といい、正一は明治13年10月5日、平鹿郡館合村(現雄物川町)薄井の旧士族で地主でもあった三郎治、ウタの長男に生まれました。

幼い頃から音楽を好み、また頭脳明せきな少年で、明治24年3月に薄井尋常小学校を出た後、同校温習科を優等で卒業。さらに明治28年3月、大曲尋常高等小学校高等科を優等で卒業しました。そして、東京の私立日本中学に入学しますが、ここで正一は運命的な人脈に出会います。すなわち、「嗚呼玉杯に」の作詞者矢野勘治、一高東寮委員の松野松太郎、「緑もぞ濃き」の作詞者柴硯人とはいずれも日本中学の同窓で、正一は一年後輩でした。

明治33年7月、あこがれの第一高等学校二部理科に入学しました。そのころの一高(現東大教養

学部)は本郷弥生町にあり、一帯の丘陵地が向ヶ岡で、そこに「そそり立つ五寮」(実際は六寮)があり、全寮生活でした。

正一は一高で学ぶかたわら、上野の東京音楽学校・夜間専科にも通い、新しい時代の音楽を学びました。また、一高音楽部の創設にもかかわっております。

「嗚呼玉杯に」「緑もぞ濃き」の名曲を残し、天才作曲家の名声を得ながら、三年生の3月、卒業と東大進学を目前にした時の人楠正一はこつ然と姿を消します。

昭和20年7月16日、楠正一は札幌市でなくなりました。

そして今、雄物川町薄井の墓地に両親とともに眠っています。

主な曲

「ああ、玉杯に花うけて」作詞 矢野勘治／作曲 楠正一

「水平歌」作詞 柴田啓蔵／作曲 楠正一

「農民歌」作詞 満友万太郎／作曲 楠正一

*嗚呼玉杯(ああぎょくはい)は旧制第一高等学校の代表的な寮歌の一つ。正式名称は、第十二回記念祭東寮寮歌。正確には、「第十二回記念祭寮歌」。但し、当時は5棟あった寮がそれぞれ寮歌を選定していたため、「第十二回記念祭寮歌」も6曲ある(一曲は東大寄贈歌)。区別のために、頁の末尾に「(三十五年東寮)」と附記されている。

日本三大寮歌の一つとされ、寮歌の中で最も人口に膾炙した歌の一つである。

成立年: 明治35年(1902年)

作詞者: 矢野勘治(1882年生-1961年没)

*原曲は長調だったが、短調化して広まった。作者を上記の者以外とする誤記が散見される。矢野勘治によれば当初は和文調の歌詞であったが先に曲ができてしまい、楠等の意向により、漢文調の歌詞に改めたという。

内容

寮から平和ボケした下界を見下ろし、自治の理想と救国の使命に燃えるエリートの心意気を歌っている。冒頭の酒宴を催しているのは、本来は下界であったが、後に、生徒らの酒宴とする解釈が流布した。しかし歌詞を見れば分かるが、後者の解釈であるためには「耽りたり」「耽りつつ」である必要があり、「耽りたる」は「栄華の巷」にかかっていることから、この解釈は誤りである。

第1節で見下ろされている下界(栄華の巷)は、平和ボケした一般人民を指すとする解釈と、腐敗した特権階級を指すとする解釈とがあり、作成された明治35年(実質的には前年)を考慮した場合、後者にもとれるが確たる資料はない。ただし当時の一高の各寮歌を見た場合、ロシアを意識した歌詞が見られることから、その辺を含めた何かはあったのかもしれない。

影響

旧制第一高等学校の中のみならず、女学生や演歌師らによって世間一般にも広められたため、メロディーを利用した数多くの替え歌が存在する。多くは短調化した曲が使われた。

その他の歌

『仰げば巍々たる』(陸軍士官学校。明治35年。作詞者不詳)

『嗚呼革命は近づけり』（革命歌。明治41年。築比地仲助 作詞）

『ああ解放の旗高く』（水平歌(解放歌)。大正11年。柴田啓蔵 作詞）全国水平社の歌

『きけイエス君の』（救世軍歌 319番。山室軍平 作詞）長調

*革命歌

（作詞：築比地仲助 作曲：楠正一）「ああ玉杯」の譜・1907年

1 嗚呼革命は近づけり 嗚呼革命は近づけり
起てよ白屋檻樓の児 目覚めよ市井の貧窮児
見よわが自由の樂園を 蹂躪したるは何者ぞ

2 見よ我が正義の公道を 壊廢したるは何奴ぞ
压制横暴迫害に われらは何時まで屈せんや
我が脈々の熱血は あくまで自由を要求す

3 我等に自由なからずば むしろ墳墓をえらばんと
わが同胞はロシアにて 絶叫しつつ在らざるか
春爛漫の花さへも 権門勢家の為に咲き

4 秋玲瓏の月さへも 瑤台朱閣の為に照る
我が児はかつて戦場に 彼等の為に殺されき
老いたる父もいたましく 彼等の為に餓死したり

5 嗚呼積年のこの怨み いかで報いで止むべきか
我等は寒く飢ゑたれど なほ団結の力あり
ああ起て君よ革命は 我等が前に近づきぬ

6 農夫は鋤鍬とつて起て 樵夫は斧をとつて起て
坑夫はつるはしとつて起て 工女は梭をとつて起て
森も林も武装せよ 石よ何故飛ばざるか

7 我等が皆屍血下つては やがて染めなす赤色旗
高くかかげて惨虐に 反逆すべく絶叫せよ
ああ革命は近づけり ああ革命は近づけり

他の有名曲と較べて、シンプルな歌詞とメロディー。大正時代に作られた寮歌・校歌よりも、10年前後、誕生が早い。そのせいか、骨格的にかなり骨太で、各フレーズも胸に素直に沁みこんでくる感じだ。5、6人の歌唱を聴いたが、加藤登紀子の歌唱が良かった。彼女は、この曲の基本的な意図に沿って、シンプルでピュアな力強さを押し出そうとしている。

(詞・曲について、近似ではあるが3説あり)

1 作詞者：沢村胡夷 作曲者：不明

2 作詩・作曲 沢村 胡夷

3 作詞 胡夷・澤村専太郎 作曲 K・Y

一

紅（くれない）もゆる丘の花

狭緑（さみどり）匂ふ岸の色

都の春に嘯（うそぶ）けば

月こそ懸（かゝ）れ吉田山（よしだやま）。

二

緑の夏の芝露に

残れる星を仰ぐ時

希望は高くあふれつゝ

われらが胸に湧きかへる。

三

千載（せんざい）、秋の水、清く

銀漢（ぎんかん）、空に冴（さゆ）る時

かよへる夢は崑崙（コンロン）の

高嶺（たかね）の此方（こなた）、戈壁（ゴビ）の原。

四

ラインの城や、アルペンの

谷間（たにま）の氷雨（ひさめ）、なだれ雪

夕（ゆふ）べはたどる北冥（ほくめい）の

日の影、暗き冬の波

五

ああ、故郷（ふるさと）よ、野よ、花よ

此処（ここ）にはもゆる六百の

光も胸も春の扉（と）に

嘯（うそぶ）く水（みず）や、古都（こと）の月。

六

それ、京洛（けふらく）の岸に散る

三歳（みとせ）の秋の初紅葉

それ京洛（けいらく）の山に咲く

三歳（みとせ）春の花嵐

七

左手（ゆんで）の書（ふみ）にうなづきて

夕（ゆふ）べの風に吟（ぎん）ずれば

碎けて飛べる白雲（しらくも）の

空には高し、如意ヶ嶽（によいがたけ）

八

神楽ヶ岡（かぐらがおか）のはつしぐれ（初時雨）

老樹（ろうじゅ）の梢（こづえ）伝（つた）ふ時

穂燈（すゐとう）かゝげ、吟（くちずさ）む

先哲至理（せんてつしり）の教（をしへ）にも

九

ああ、また遠き四千年（しせんねん）

血潮（ちしほ）の史（ふみ）や西の子の

榮枯（えいこ）の夢を思ふにも

胸こそ躍れ若き身に。

十

希望は照れり。東海（とうかい）の

み富士の裾（すそ）の山桜（やまざくら）

歴史を誇る二千載（にせんざい）

神武（じんむ）の子（こ）等（ら）の起（た）てる今。

十一

ああ洛陽の花がすみ

桜のもとの健児（をのこ）らが

今、逍遙に、月白く

静（しずか）に照れり。吉田山

（収集プロフィール）

沢村 胡夷（さわむら こい、1884. 1. 1(明治17)～1930. 5.23(昭和 5))滋賀県彦根生れの美術史家・詩人。本名は専太郎。父は鉄道設計技師。父母が台湾に渡ったので、故夷は祖父母のもとで育ちました。滋賀県第一中学校（現、彦根東高校）を卒業し、1903年（明治36）第三高等学校に入学。中学時代からはじめた作詩活動に励みました。三高の代表的寮歌「逍遙之歌」（紅もゆる丘の花）は彼の作品です。京都帝国大学文科に進学して美術史を専攻するかたわら、史詩「壇の浦」を発表しました。また詩集『湖畔の悲歌』で詩人として有名になりました。大学を卒業すると上京し美術雑誌「国華」の編集者となり、東京帝国大学大学院に通いました。1919年（大正8）京都帝国大学助教授となり美術史を講義し、平等院鳳凰堂などの壁画模写を指導

した。

『逍遙の歌』（しょうようのうた）は、京都大学の前身の一つである旧制第三高等学校の寮歌。歌い出しは「紅もゆる岡の花」。旧制第一高等学校の『ああ玉杯』、北海道帝国大学予科の『都ぞ弥生』と共に、「日本三大寮歌」に挙げられることが多い。

なお、他の旧制高等学校や旧制専門学校、大学予科の学生歌や寮歌にも『逍遙の歌』とか『逍遙歌』と称するものが存在するため、区別の必要から歌い出しをタイトルにすることがある（『紅もゆる』など）。

明治37年に作成されて以来、旧制時代を通じて新制京都大学の学生に親しまれている歌である。1957年には第三高等学校創立90周年を記念して、吉田山上に「紅もゆるの碑」が建てられた。1946年の黒澤明監督の映画『わが青春に悔いなし』の挿入歌に使われたことで、広く一般にも知られることとなる。1951年の新藤兼人監督映画の第一作『愛妻物語』や、松林宗恵監督の『連合艦隊』でも使用されている。

5、6人の歌唱を、聴いてみた。この類の歌唱で、いつも上位にくる加藤登紀子。だが、悪くはないが、この歌は彼女の声質に合わないようだ。この曲の意図に沿って、いつもとは違う発声で、力強さと若い蛮勇を表現しようと奮闘しているのだが。やや空回り、の感がある。北大の学生達による歌唱も、騒々しさと馬鹿騒ぎさが全体を支配していて、良くない。私が推定するに、この歌を、一定の深さと、作者の意図に沿った歌唱で表現出来るのは、次の3人。秋川雅史、冠二郎、ロベルト杉浦。グループでは、ダーク・ダックス、ポニー・ジャックス。

(作曲・赤木顕次 作詞・横山芳介)

一
都ぞ弥生の雲紫に 花の香漂ふ宴遊(うたげ)の筵(むしろ)

尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮ては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我胸想ひを載せて

星影冴かに光れる北を

人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に 雁(かりがね)遙々(はるばる)沈みてゆけば

羊群声なく牧舎に帰り 手稻の嶺(いただき)黄昏(たそがれ)こめぬ

雄々しく聳ゆる楡の梢 打振る野分(のわき)に破壊(はゑ)の葉音の

さやめく蕙(いらか)に久遠(くをん)の光り

おごそかに 北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸(かか)れる針葉樹林 櫓の音(ね)凍りて物皆寒く

野もせに乱るる清白の雪 沈黙(しじま)の暁霏々(ひひ)として舞ふ

ああその朔風飄々(ひょうひょう)として 荒(すさ)ぶる吹雪の逆巻くを見よ

ああその蒼空(そうくう)梢聯(つら)ねて

樹氷咲く 壮麗の地をここに見よ

四

牧場(まきば)の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌(きざ)し

雲ゆく雲雀に延齡草の 真白(ましろ)の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光(ひかり) 小河の濤(ほとり)をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉

春の日の この北の国幸多し

五

朝雲流れて金色(こんじき)に照り 平原果てなき東(ひんがし)の際(きわ)

連なる山脈(やまなみ)冷凜として 今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術(たくみ)を懐(なつかし)みつつ 高鳴る血潮のほとばしりもて

貴（たふ）とき野心の訓（をし）へ培ひ

栄え行く 我等が寮を誇らずや

(収集プロフィール)

横山芳介（よこやま よしすけ、1893年 - 1938年）東京出身の作詞家。

来歴

1909年、東京高等師範学校附属中学校（現・筑波大学附属中学校・高等学校）卒業。東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）卒業。日本三大寮歌のひとつである、北海道大学恵迪寮の寮歌「都ぞ弥生」を作詞した。大学卒業後、小作調停官として静岡県に赴任。開明的実務家として、農民の側に立って地主との調停を行うなど、ヒューマニズムにあふれた小作官として親しまれたが、若くして亡くなった。

都ぞ弥生（みやこそやよい）は、北海道大学の学生寮である恵迪寮の寮歌の一つ。

1912年（明治45年）度の寮歌として作られた。当時の恵迪寮は、北海道大学の前身となる東北帝国大学農科大学の予修科（予科）学生の寄宿舍であった。恵迪寮では1907年から寮歌が作られており、都ぞ弥生は第6回目の寮歌である。

作曲者は当時予科3年生であった赤木顕次（1891年 - 1959年）。作詞者は同じく2年生であった横山芳介。

概要

都ぞ弥生は自然の美しさを讃える歌詞であるのが特徴である。色彩や光彩を表現する言葉が多く使われ、星・雲・空などの広大な自然を表す言葉も多い。1番の歌い出しの「都」とは、今日ではしばしば札幌のことと誤解されるが、当時の札幌は都会ではなかった。また、当時の大学予科は9月入学であり、1番の歌詞は実際には、華やかな都（おそらく東京）の春の桜の姿を暫時のものに見限り、「人の世の清き国」北海道に憧れた心情を歌っているのである。

歌詞は5番までであるが、1・2番のみや1・2・5番のみが歌われることが多い。寮生や応援団により歌われているメロディーと合唱団などにより歌われているメロディーには若干異なる所がある。また、寮生や応援団によるもののほうがゆっくりとしたテンポで、間をとって歌われる。

前口上

都ぞ弥生を始めとする恵迪寮歌の前口上は、次の通り。

吾等（われら）が三年（みとせ）を契る絢爛のその饗宴（うたげ）は、げに過ぎ易し。

然れども見ずや窮北に瞬く星斗（せいと）永久（とわ）に曇りなく、雲とまごう万朶（ばんだ）の桜花久遠（くおん）に萎えざるを。寮友（ともどち）よ徒らに明日の運命（さだめ）を歎かんよりは榆林（ゆりん）に篝火（かがりび）を焚きて、去りては再び帰らざる若き日の感激を謳歌（うた）はん。

この後に、都ぞ弥生の場合は「明治45年度寮歌、横山芳介君作歌・赤木顕次君作曲、都ぞ弥生、アインス、ツバイ、ドライ」（ドイツ語で「一、二、三」）と続け、歌に入る。北海道大学の寮歌の前口上では、先輩に敬意を表して作詞者、作曲者の名前を君付けで紹介する。

この前口上は「榆陵謳春賦」と呼ばれ、現在では都ぞ弥生の前口上として述べられることが多いが、実際には1936年（昭和11年）に同寮歌である『嗚呼茫々の』の序文として当時の学生穴戸

昌夫によって書かれたものである。

*青春の哀歓を歌う。名歌が生まれた北大恵迪寮の南側に立つ「都ぞ弥生」碑。昭和32（1957）年建立。

明治45（1912）年の北大恵迪（けいてき）寮歌「都ぞ弥生」は、日本3大寮歌のひとつに数えられる。その美しい歌詞は寮生の横山芳介が書き、荘重なメロディーは赤木顕次がつけた。横山は生まれも育ちも東京。稲も麦も知らない彼は故あって、農学部を志願した。

「文学への道を断念したことなど、押えに押えた感情が北海道の大自然にふれて結晶したのが“都ぞ弥生”であったのかもしれませんが」

名歌詞の誕生した背景を、令息横山芳男氏はこう書いている。

芳介は農学部卒業後、静岡で県の小作官を勤めたが、多くの農民に慕われつつ46歳の短い生涯を閉じた。

青春の哀歓をロマンたっぷりのメロディーに刻んだ赤木は、横山より1級上の予科3年。

後輩の名歌詞に感動した彼は、バイオリンを鳴らして悪戦苦闘の末、「都ぞ弥生」のあの美しいメロディーを完成させた。ところが、「素人の作曲だから専門家に手を入れてもらったかどうか」といった意見が寮生から出た。

「そんなことをするなら全面的に作曲を辞退する」

当の赤木は猛憤慨。これを恩師の有島武郎が支持して、横山、赤木の学生コンビによる寮歌が生まれた。明治45（1912）年のことである。

文豪、かつ二人の恩師でもあった有島武郎作詞の北大校歌「永遠の幸」より、弟子の作った寮歌「都ぞ弥生」が創基100年を迎えて今なお愛唱されているのは、皮肉といおうか愉快的な話だ。

*他の多くの寮歌は七五調ですが、「都ぞ弥生」は、当時はまだ少なかった八七調の雄大な歌詞です。八七調は重苦しいと言われていましたが、重々しい北海道の情感を表現するのに成功した。美しくも雄大な北海道の四季を描いたこの詩は、北海道の魅力をあますことなく詠い上げています。

*昭和58年の秋、場所は東京渋谷の某ビル地下1階のバー（或いはクラブ）。いつもは引っ込み思案の私が、どうした風の吹き回しか、同窓生でない或る人物を私の一存でこの会に招いたのである。名前を「赤木五郎」という。年齢は60歳台半ば。当時、私が勤めていた「鐘紡」の技術顧問で、研究心旺盛な学者肌の人であった。微生物による排水処理の研究をしていた私達のグループのお手伝いをお願いし、親しく話す機会も多かった。その赤木さんが或る時フト、福田さん達がよく歌う北大寮歌「都ぞ弥生」の作曲者赤木顕次は、実は私の兄です。と洩らされたのである。明治45年寮歌、と耳にタコが出来ている私はタイムマシンのショックを受けると同時にその奇遇に驚いた。これは放っておけない。

赤木五郎氏は、北大卒業生ではなく、旧制第一高等学校卒業後、東大には進まず、東京工大で電気化学を学ぶという一風変わった経歴の持ち主。千葉県市川市に住んでおられた。さて、当日夕刻、そのビルで待っていたら、彼はもう1人の赤木さんを連れて来た。私と同じ年頃の温厚な紳士であった。名刺には、防衛医大小児科学教室講師、医学博士「赤木稔」と書かれていた。話によると赤木顕次の長男であるという。私は二度驚いた。

予定どおり、会が進行し、恒例の「都ぞ弥生」の場面を迎えることとなった。赤木五郎さんは予め用意していたのか白い手ぬぐいを取り出してキリリと鉢巻をしめ、肩組みの輪に加わった。男どもの熱唱がひとしきり、狭いサロンを揺るがした。両赤木氏は嗚咽をこらえながら、些か緊張の面持ちで身体を左右にゆらせていた。

手帳のメモによると、これは1983年（昭和58年）10月1日（土）の出来事である。このことがあってから僅か1年後の昭和59年10月、赤木五郎さんが心臓麻痺で急逝されたという悲しい報せが届いた。

さくら貝の歌、北帰行、などと並んで、私の抒情歌ベスト10に入る歌である。この歌を知ったのは、小林旭の歌う歌謡曲としてだった。彼が実際にテレビで歌唱する姿を、当時4、5回見たし、ラジオからもよく流れてきた。それから15年くらいして、この歌が学生歌だった、ということを知ったのだが。

2番、3番の歌詞が、アラ・還まで生きてくると、しみじみと深く判るのだ。島崎藤村は、この詩を、20代で発表している。その、文学的洞察力(手腕?)は、さすがというべきであろう。私は、他の方よりもずっと少ないが、それでも、ある程度以上の交流のあった方に絞っても、いままでに500人以上の方々と別れて来たであろう。華やいだり、美しかったりした日々は、ほんの少しだったけれど、それでもそれらの日々への感慨は深い。もう、けして取り戻せない、あの日や、あの人々。この歌は、私にあれこれと、物を思わせるのだ。

(原詩：島崎藤村 作曲：藤江英輔 1945年)

中央大学校歌版

1. 遠き別れに耐えかねて
この高樓にのぼるかな
悲しむなかれわが友よ
旅の衣を整えよ
2. 別れといえば昔より
この人の世の常なるを
流るる水を眺むれば
夢はずかしき涙かな
3. 君がさやけき目の色も
君くれないの唇も
君がみどりの黒髪も
またいつか見んこの別れ
4. 君の行くべき山川は
落つる涙にみえわかず
袖の時雨の冬の日
君に送らん花もがな

(流布版・4番のみ歌詞が異なります。)

4. 君がやさしき なぐさめも
君が楽しき 歌声も
君が心の 琴の音も
またいつか聞かん この別れ

(収集プロフィール)

藤江 英輔 (ふじえ えいすけ、1926～) 中央大学法学部卒業。1950年、新潮社に

入社。広告局長を最後に退社。以降、会社を経営。

*造兵廠での別れの場で歌われ始めたこの曲は、次第に送別の歌として広まっていく。昭和30年頃より全国の「歌声喫茶」で大いに歌われました。この第1節3行目の歌は「悲しむなかれ我が姉よ」で遠方へ嫁ぐ姉を思う姉妹愛の詩でしたが、この「姉よ」を「友よ」と替えて、広く愛唱されて来ました。昭和36年に小林旭のレコード発売に伴い島崎藤村の遺児翁助氏より、藤江英輔氏が改作の追認を受けたとのこと。

*中央大学の先輩でもあり、私がかつて勤務した新潮社の先輩でもある藤江さんは、私の最も尊敬するジャーナリストの一人である。戦争末期の昭和19年から20年、中大予科の学生だった藤江さんは東京・十条の第一陸軍造兵廠に勤労働員で通い、連日、武器づくりに励んでいた。小さい時からバイオリンを習っていた藤江さんは、いよいよ戦況が厳しくなった昭和20年2月の大雪の日、仲間が召集令状を受けて去っていく中、彼らを見送る思いを「惜別の歌」に託した。姉妹の別れを詠んだ島崎藤村の「高樓（たかどの）」という詩を“友との別れ”に置き換えて、物悲しく、哀愁のある独特の旋律を藤江さんがこの詩につけたのだ。

*それを見て、私はビックリしました。伝説の人・藤江英輔氏が自ら書いた『惜別の歌』の誕生物語だったからです。それは21世紀社という出版社が出していた『センチュリーフォーラム21』という小冊子の平成15年4月臨時増刊号に掲載されたものでした。

この曲を聴くと、いつも心を揺すられる。日本人の琴線をかき鳴らすフレーズの数々と、回想と悔悟、哀愁と孤愁に満ちた、平坦で果てしなく深いメロディー。別の角度から表層だけ取り上げ、かつ狭義で見ると、はぐれ者が、関東・関西辺りから、雄大な、東北、北海道をめざして、ひとり彷徨う、といったいかにもの風情だが。それは、アカンがな。そういう「渡り鳥シリーズ」的発想は、駄目。まあ、受け止め方は人さまざまで、それでいいのだけれども。実は、この曲には、隠された壮大な物語と、昭和初期の終わりから中期にかけての「知的無頼の浪漫」がある。まあ、今の時代には、起きようもない物語だが。

(作詞・作曲：宇田 博、唄：小林 旭)

- 1 窓は夜露に濡れて
都すでに遠のく
北へ帰る旅人ひとり
涙流れてやまず
- 2 夢はむなしく消えて
今日も闇をさすろう
遠き想いはかなき希望 (のぞみ)
恩愛我を去りぬ
- 3 今は黙して行かん
なにをまた語るべき
さらば祖国愛しき人よ
明日はいずこの町か
明日はいずこの町か

原曲 (旅順高等学校寮歌)

- 1 窓は夜露に濡れて
都すでに遠のく
北へ帰る旅人一人
涙流れてやまず
- 2 建大 一高 旅高
追われ闇を旅ゆく
汲めど酔わぬ恨みの苦杯
嗟嘆 (さたん) 干すに由なし
- 3 富も名誉も恋も
遠きあくがれの日ぞ
淡きのぞみ はかなき心
恩愛我を去りぬ
- 4 我が身容 (い) るるに狭き

国を去らむとすれば
せめて名残りの花の小枝（さえだ）
尽きぬ未練の色か
5 今は黙して行かむ
何をまた語るべき
さらば祖国 わがふるさとよ
明日は異郷の旅路
明日は異郷の旅路

(収集プロフィール)

宇田博（うだ ひろし、1922～1995年8月9日）

奉天一中で四修で旧制第一高等学校（一高）の受験に失敗、建国大学予科（満州国新京）に入学したが半年で退学となり、1940年（昭和15年）、開校したばかりの旧制旅順高等学校に入学した。宇田は同校の第一回寮歌『薫風通ふ春五月』（村岡楽童 作曲）を作詞している。

*旅順高校は昭和16年、皇紀2600年(西暦1940)年を記念して創立された。三十有余の旧制高校の最末端で、敗戦まで五年しか続かなかったのだから、一高三高などの前に出るとまったく冴えない存在であるが、これら一高三高の寮歌に比べてはるかに有名なのが北帰行である。北帰行は認定された正式の寮歌ではないが生徒が愛唱するいわば自主的な寮歌であ特高に睨まれる、あるいは生徒課に呼び出されると言う事はとてつもなく恐ろしい事だった。多くの教師が事情の説明もなく辞めていった。退学になった生徒も多かった。私はそれが弾圧であるかないか事情を知らない。たぶん弾圧だと思う。

そんな時、先輩の宇田博が退学処分を食らった。理由は知らされなかった。後に彼は退学の理由を聞かれて、「今の言葉のデートに当たる事をしただけですよ」と答えている。恋愛を口実に自由主義的生徒を追放したのであろう。

*北帰行（ほっきこう）は1961年（昭和36年）にヒットした日本の歌謡曲である。歌手小林旭。原歌は、旧制旅順高等学校（旅高）の愛唱歌（広義の寮歌）。

*成立年: 昭和16年（1941年）

歌謡曲版と寮歌版とでは、歌詞・曲ともに若干異なる。歌謡曲版の歌詞は3番までだが、寮歌版は5番まで存在する。また、出典により順番が相違しているものがあるが、宇田直筆の歌詞において相違している。

*戦時体制下の新設校だった同校に、宇田の望んだバンカラで自由な校風は存在せず、彼は常々生活指導の教官に目を付けられていた（もっとも、宇田自身はバンカラタイプではなかった。280ヶ条もあった校則に、常々反発していた旨を述懐している。#書籍『大連・旅順はいま』138頁-142頁など）。

1941年（昭和16年）5月、宇田はメツチェン（女の子）とデートして戻ったところを教官に見つかり、“性行不良”で退学処分となった。彼が、同校への訣別の歌として友人たちに遺した歌が、この『北帰行』である。そのため、同校の正式の寮歌ではないが、広義の寮歌として歌われてきた。宇田はその後内地に渡り、旧制一高を卒業した。彼は東京大学を経て、東京放送（TBS、現・

東京放送ホールディングス / TBSテレビ・TBSラジオ)に入社し、後に同社の常務・監査役を歴任している。

*旅順高等学校関係者によれば、この歌は自由への解放を歌い上げたものであり、単なる流浪の歌として理解されるべきではないとされるが、これは歌詞を五番まで全て歌った場合のものであるといえる。省略されることの多い完全版の歌詞では、満州各地の学園で体験した強圧的な体制への憤懣と、決して容れられることのない己の存在を嘆いた宇田個人の心情が率直に歌われているからである。

歌詞に明確な学校当局への反抗がこめられているため、宇田が去った後の旅順高校では『北帰行』を歌うこと自体を禁じようとする動きも見られたが、一部のリベラルな教師たちの擁護によって、禁止曲となることは免れたという。

*旧制旅順高等学校は、昭和20年(1945年)8月、日本の第二次世界大戦敗戦と共に廃校となった。他の旧制高等学校と異なり後身校は存在せず、寮歌としての歴史はここで終了となった(寮歌祭では、同校同窓生により寮歌の一つとして歌われ続けている)。一方で、この歌は戦後、歌声喫茶で作者不詳の歌として流行した。恐らく、作者の卒業した一高・東大あたりから歌声喫茶に広まったものと思われるが、詳らかでない。

昭和36年(1961年)、この歌は日本コロムビアのプロデューサーや小林旭に見い出され、同社からレコード化されて大ヒットした。この際 作者捜しが行われ、当時TBS社員だった宇田の名乗り出、および旅順高校時代の友人が持っていた宇田直筆の歌詞から、作者が確定したという。

歌のヒットにより、小林が主演する映画『渡り鳥シリーズ』(日活)の昭和37年(1962年)正月封切り版『北帰行より 渡り鳥北へ帰る』の主題歌となった。小林のバージョンは現在まで最も流布したものであるが、原曲とは相当に変化した部分がある。もっとも作者の宇田自身は、小林の歌を晩年に至るまでいたく気に入っていたという。

*1961年に小林旭が歌ってヒットしました。この歌は一般的な歌謡曲ではありません。向陵駒場同窓会発行の一高の寮歌集(昭42)に採録されており、紛れもなく寮歌です。昭和16-18作詞作曲 宇田博 とあります。

*これが北帰行の元歌です。作詞者の心情がストレートに表現されていて、しかも格調が高い歌詞です。所謂、典型的な一高寮歌調でなく、抒情的なところが多くの人に共感を呼んでいる理由では。

*私見をいえば、小林旭の歌はちょっと違うんじゃないか、という感じがします。日活映画「渡り鳥シリーズ」のイメージが強いために、小林旭が歌うと、「流れ者のさすらい歌」のようになってしまい、原曲がもつ「知的無頼を気取る青年の挫折」ようなものが感じられないのです。しかし、作者の宇田自身は小林旭の歌唱が非常に気に入っていたようで、「おれが死んだら、お経も何もいらぬ、この歌を流してくれ」と、家族や友人たちにいつていたそうです。

*宇田博は、奉天一中を四修で出て一高を受験し失敗、大陸に戻って建国大学予科に入学、半年で退学して開校したばかりの旅順高等学校に入学。後に一高、東大文学部仏文を卒業して東京放送に入り、常務、監査役を歴任。

成立の背景は宇田博の著作、落陽の市街図(六法出版社1990年)、大連・旅順はいま(1992年

六法出版社）、誘蛾灯（2001年 朝日新聞社）などに詳述されており、戦中戦後を苛烈な中国東北部（奉天、長春、旅順、大連）で暮らした自由人、宇田博が活写されています。宇田博は極めつきの自由人であり、体制に対する反骨行動もかなりのものでした。旅順高等学校の寮の娯楽室の壁に「生徒は一流、校舎は二流、校長、教師はみな三流」と落書したのはその一例。間もなく退学になったのも自然な成り行きでした。

*宇田は、『敗北のうたであり、流離のうたである』と友人に話している。友人は『北は、物理的な北ではなくて、遥かな遠い憧れ』。

私が子供だった頃、この曲は、テレビやラジオからときどき流れていた。周囲の大人たちの反応は、「ああ、可哀想な歌ね」とか、「気の毒よねえ」といったものだった。私は、はじめはよく判らなかったが、だんだんと歌の背景の海難事故について、理解するようになっていった。さまざまな評価があるようだが、私は、若い生命への哀悼と、断ち切られた親子の深い絆の痛み、を感じる。この曲は、いまでもコンスタントに、全国で唄われているようだ。芹洋子、クラシック系歌手など、5、6人の歌唱を聴いてみた。素直で雑念を省いた、倍賞千恵子の歌唱が特に心に響いた。

(三角 錫子 作詩 ジェレマイア・インガルス (Jeremiah Ingalls) 作曲 明治43)

- 1 真白き富士の根 緑の江の島
仰ぎ見るも 今は涙
帰らぬ十二の 雄々しきみたまに
捧げまつる 胸と心
- 2 ボートは沈みぬ 千尋(ちひろ)の海原
風も浪も 小(ち)さき腕(かいな)に
力もつきはて 呼ぶ名は父母(ちちはは)
恨みは深し 七里が浜辺
- 3 み雪は咽(むせ)びぬ 風さえ騒ぎて
月も星も 影をひそめ
みたまよいずこに 迷いておわすか
帰れ早く 母の胸に
- 4 みそらにかがやく 朝日のみ光
やみにしずむ 親の心
黄金も宝も 何しに集めん
神よ早く 我も召せよ
- 5 雲間に昇りし 昨日の月影
今は見えぬ 人の姿
悲しさ余りて 寝られぬ枕に
響く波の おとも高し
- 6 帰らぬ浪路に 友呼ぶ千鳥に
我もこいし 失(う)せし人よ
尽きせぬ恨みに 泣くねは共々
今日もあすも 斯(か)くてとわに

(収集プロフィール)

三角錫子(みすみ すずこ、1872(明治5年)~1921(大正10年))

石川県出身の日本の教育者。女子高等師範学校卒業。常磐松女学校(現トキワ松学園)初代校長。『

『七里ヶ浜の哀歌』の作詞者として知られる。

学歴

1892年3月 女子高等師範学校数学科卒業。

職歴

1916年 常磐松女学校校長。

真白き富士の根（ましろきふじのね）は、逗子開成中学校の生徒12人を乗せたボートが転覆、全員死亡した事件を唄った歌謡曲である。「真白き富士の嶺」、「七里ヶ浜の哀歌」とも呼ばれる。1935年、1954年にはこの事件を題材にした同名の映画にもなった（なお、1963年の日活による同名映画は事件とは関係ない）。

基本データ [編集] 成立年：1910年（明治43年）

作詞者：三角錫子（みすみ・すずこ、1872年-1921年）

作詞当時、系列校である鎌倉女学校（現・鎌倉女学院）の教師だった。

東京都目黒区にあるトキワ松学園中学校・高等学校の設立者でもある。

概要

「七里ヶ浜の哀歌」の方が原題に近いが、一般には、歌い出しの歌詞から「真白き富士の根（嶺）」と呼ばれる。

1910年（明治43年）1月23日：ボート転覆事故発生。

1910年2月6日：逗子開成中学校にて追悼大法会開催。

鎌倉女学校生徒らにより、鎮魂歌としてこの歌が初演された。

1915年（大正4年）8月：レコードが発売された。

1916年（大正5年）：歌詞・楽譜が刊行された。題名は「哀歌（真白き富士の根）」。

このころから演歌師によって一般に広められ、歌謡曲となった。

1935年（昭和10年）：松竹により映画化。題名は「真白き富士の根」。主題歌は松原操が歌唱。

1954年（昭和29年）：大映により映画化。題名は「真白き富士の嶺」。主題歌は菊池章子が歌唱

。

*1805年、ジェレマイア・インガルスは白人霊歌集『クリスチャン・ハーモニー (Christian Harmony)』を刊行した。同歌集に掲載された曲『Love Divine』と『真白き富士の根』はかなり似ており、同曲が起源と考えられる（同曲はイギリスの民謡を元にインガルスが編曲したもの、との指摘もなされている）。手代木によれば、同曲には2種類の歌詞が付けられていた。(1)「To him who did salvation bring」で始まる歌詞と、(2)「The Lord into his garden's come」で始まり第5節が「When we arrive at home.」で終わる歌詞とである。

1835年、アメリカ南部で刊行された賛美歌集『サザン・ハーモニー (Southern Harmony)』には、同曲は「Garden」の名で収録された。歌詞は「The Lord into His garden comes」で始まる歌詞が付けられた。

統一協会の成約聖歌には、サザン・ハーモニー版に近い曲が『園の歌』として収録されている。出典は「SOUTHERN FOLK」（南部民謡）とのみ記されており、歌詞は多少アレンジされている。参照：英語版、日本語版。

『園の歌』と『真白き富士の根』の関係は、一橋大学教授（当時）の櫻井雅人が指摘している。
参照：『一橋論叢』132巻3号(2004.9):「ナンシー・ドーソン」とその関連曲 205頁。

1881年-1891年に刊行された賛美歌集『Franklin Square Song Collection』では、さらに『真白き富士の根』に近い旋律となった。歌詞は、「The Lord into His garden comes」で始まり「When we arrive at home.」で終わる。天国での来世に希望を託す歌である（なお、「ガードン作曲」説は、当時の賛美歌譜に付されていたチューンネーム「Garden」を堀内敬三が作曲者名と見誤ったのが起源、と推測されている。→岩波文庫『日本唱歌集』）。

日本国内においては、同曲は1890年（明治23年）刊行の『明治唱歌』において、『夢の外』（大和田建樹作詞）として採用された。三角錫子はこの唱歌の替え歌として『七里ヶ浜の哀歌』を作詞したのである。『夢の外』の2番、『七里ヶ浜の哀歌』の4番の歌詞については、共にキリスト教の影響が指摘されている。『七里ヶ浜の哀歌』5番の「悲しさ余りて寝られぬ枕に」は、『夢の外』3番の「うれしさあまりてねられぬ枕に」がヒントとなっている。

この曲は、歌謡曲経由で、再びキリスト教賛美歌に使用されるに至った。日本福音連盟『聖歌』（1958年）623番、『新聖歌』（2001年）465番、聖歌の友社『聖歌（総合版）』（2002年）669番の『いつかは知らねど』である（喜田川広作詞、1957年）。歌詞の第1節、第2節、第4節は、原曲の「When we arrive at home」を意識したものとなっている。

*今から100年前の海難事故で亡くなった「無謀な」12人の少年（一部は青年）への鎮魂歌ですが、もしこの事故が現在起こったら、社会はどのような反応をするのでしょうか。多分、「自己責任」という、冷たい評価が多いのではないかと、思えてなりません。マスコミもそういう切り口で報道するのでしょうか。

書籍

手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』音楽之友社、1999年

安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語 讃美歌と近代化の間で』文春新書、2003年

歌唱の底に、どこか土俗的な感性を感じさせる歌唱である。来歴がよくわからないが、民謡・浪曲などの伝統芸能の影響や、浅草オペラの間もある。

（収集プロフィール）

東 一声（あずま いっせい、**1886年**（明治18年）**4月9日** - **1950年**（昭和25年）**8月17日**）大正時代から昭和初期にかけて活躍した、**歌手**、**演歌師**、**活動弁士**。京都府出身。

経歴 [編集]

無声映画時代の**帝国キネマ**専属のアトラクション演歌師として活躍していた。大正時代に流行した**書生節**『春の名残り』のメロディを取った『ラインの流れ』とジャズ小唄『酒場の桜』を1928年（昭和3年）に、**名古屋**のアサヒレコード（ツル印レコード）で発売してヒットし、その後も続々と映画小唄やジャズ小唄を吹き込んだ。1930年代後半に引退をして、戦後は地元の京都で音楽教室を開いていた。1950年（昭和25年）に死去。享年64。

代表曲 [編集]

『酒場の桜』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『ラインの流れ』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『**アラビヤの唄**』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『**青空**』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『ジャズが鳴る』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『ハンドバッグモダン』（昭和3年、アサヒ（ツル印））

『百パーセント』（昭和4年、アサヒ（ツル印））

『悩ましの胸』（昭和4年、アサヒ（ツル印））

『カフエー行進曲』（昭和5年、ヒコーキ、**東八重子**の歌唱で、東一声は映画説明を行っている）